

四柳白山下遺跡Ⅱ



土万田、記載書畫土器 径13.6cm

1991

羽咋市教育委員会

四柳白山下遺跡Ⅱ

1991

羽咋市教育委員会



(1)掘り上がったSB04・05・SD04(北から)



(2)掘り上がったSB04・SD04(東から)



墨書文字「倉高」



墨書文字「倉高女」



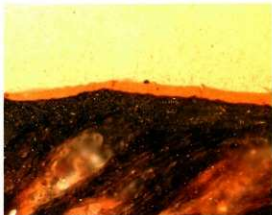
墨書文字「土万呂」



墨書文字「東家」



墨書文字「忍人」



漆器の塗膜層写真 (100×)

四柳白山下遺跡発掘調査報告書Ⅱ

目 次

	頁
例 言	V
第1章 遺跡とその周辺	1
第2章 調査に至る経緯と経過	3
第1節 第2次調査に至る経緯	3
第2節 第2次調査の経過（日誌抄）	4
第3章 第2次調査の概要	6
第1節 第2次調査区の設定	6
第2節 土層の概要	7
第4章 遺構と遺物	9
第1節 遺構の概要	9
第2節 各 説	9
(1) 溝 [SD01~17]	9
(2) 建 物 [SB04~07]	14
(3) 柱 列 [SA03]	18
(4) 配石遺構 [SX02]	24
(5) 畝 状 溝 [SU14~19]	32
第5章 出土遺物	33
第1節 各 説	33
(1) 須 恵 器	33
(2) 墨書土器	40
(3) 土 師 器	42
(4) 木 製 品	45
(5) 石 製 品	46
(6) 鍛冶関係遺物	46
第6章 漆器の塗膜分析について	47
第7章 四柳白山下遺跡の大型植物化石	49
第8章 遺構と遺物の検討	53

図 版 目 次

巻頭図版 1 (1)掘り上がったSB04・05・SD04(北から) (2)掘り上がったSB04・SD04(東から)

巻頭図版 2 遺跡出土墨書土器(上段・中段・下段左) 漆器塗膜層写真(下段右)

本文対照頁

図版 1	(1)遺跡近景(北から) (2)調査風景(西から)	1・4・5
図版 2	(1)SU14～19検出状況(南から) (2)掘り上がったSU14～19(南から)	32
図版 3	(1)SX02検出状況(南から) (2)SX02内土器検出状況(南から)	24・28・30
図版 4	(1)調査区全体遺構検出状況(西から) (2)調査区西側遺構検出状況(北から)	9
図版 5	(1)調査区中央遺構検出状況(北から) (2)調査区東側遺構検出状況(北から)	9
図版 6	(1)掘り上がった調査区全景(西から) (2)掘り上がった調査区全景(東から)	9
図版 7	(1)掘り上がった調査区中央1(北から) (2)掘り上がった調査区中央2(南から)	9
図版 8	(1)掘り上がったSB04・05・SD04(北から) (2)掘り上がったSB04・05・SD04(東から)	14・16
図版 9	(1)掘り上がったSB06(南から) (2)掘り上がったSB07(南から)	17・18
図版 10	(1)SD14内ヒキ板出土状況(南から) (2)SD06内土師器鍋出土状況(西から)	10・14
図版 11	須恵器 壺	33
図版 12	須恵器 壺	33
図版 13	須恵器 壺・無台環	33・34
図版 14	須恵器 無台環・有台環	33・34
図版 15	須恵器 有台環	34
図版 16	須恵器 壺・壺・横瓶	34・40
図版 17	須恵器 壺	34・40
図版 18	土師器 壺・鍋・甗・壺・支脚	42・45
図版 19	土師器 木製品(第13・14図)	45・46
図版 20	柱根(第12図)	16～18
図版 21	墨書文字1	40～42
図版 22	墨書文字2	40～42
図版 23	四柳白山下遺跡の大型植物化石Ⅰ	49～52
図版 24	四柳白山下遺跡の大型植物化石Ⅱ	49～52

表 目 次

	頁
第1表 土層分類表	7
第2表 建物計測表	20
第3表 須恵器坏蓋・口径分布	33
第4表 須恵器有台坏・口径分布	33
第5表 須恵器有台坏・主成分分析による2次元散布	33
第6表 須恵器無台坏・口径分布	34
第7表 須恵器無台坏・主成分分析による2次元散布	34
第8表 土師器甕・口径分布	42
第9表 四柳白山下遺跡の大型植物化石一覧表	51・52
第10表 四柳白山下遺跡出土土器の器種構成比	53
第11表 四柳白山下遺跡出土土器観察表1	57
第12表 四柳白山下遺跡出土土器観察表2	58
第13表 四柳白山下遺跡出土土器観察表3	59
第14表 四柳白山下遺跡出土土器観察表4	60
第15表 四柳白山下遺跡出土土器観察表5	61
第16表 四柳白山下遺跡出土土器観察表6	62

挿 図 目 次

	頁
第1図 古代の遺跡周辺図	1
第2図 第2次調査区域図	3
第3図 第2次調査区グリッド割図	6
第4図 調査区土層断面図	8
第5図 SD01～17出土須恵器実測図 1	10
第6図 第2次調査区全体図	11・12
第7図 SD01～17出土須恵器実測図 2	13
第8図 SB04・05・SD04実測図	15
第9図 SD01～17出土墨書土器	17
第10図 SD01～17出土土師器実測図 1	19
第11図 SD01～17出土土師器実測図 2	20
第12図 SA03・SB04～07柱根実測図	21
第13図 SD01～17出土木製品実測図 1	22
第14図 SD01～17出土木製品実測図 2	23
第15図 SX02実測図	24
第16図 SX02出土須恵器実測図 1	25
第17図 SX02出土須恵器実測図 2	26
第18図 SX02出土須恵器実測図 3	27
第19図 SX02出土須恵器実測図 4	28
第20図 SX02出土須恵器実測図 5	29
第21図 SX02出土墨書土器実測図	30
第22図 SX02出土土師器実測図	31
第23図 SU14～19実測図	32
第24図 SX02出土土師器実測図 2	32
第25図 包含層出土須恵器実測	35
第26図 包含層出土須恵器実測図 2	36
第27図 包含層出土須恵器実測図 3	37
第28図 包含層出土須恵器実測図 4	38
第29図 包含層出土須恵器実測図 5	39
第30図 包含層出土墨書土器実測図	41
第31図 包含層出土土師器実測図	43
第32図 包含層出土土師器実測図	44
第33図 包含層出土土師器実測図 3	45
第34図 砥石実測図	46
第35図 埴埴実測図	46
第36図 第1・2次調査区域図	55・56

例 言

1. 本書は、石川県羽咋市四柳町に所在する「四柳白山下遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、給油所建設にともなうもので、羽咋市教育委員会が実施した。調査に係る費用は原因者である上田石油株式会社負担および国庫の補助による。
3. 調査は、羽咋市教育委員会社会教育課主事谷内碩央・同主事今井淳一が担当した。また庶務は同係長小原慎哉がであった。
4. 調査期間は平成2年5月8日から7月9日まで延べ38日間を要した。
5. 出土遺物の整理にあたっては、遺物洗浄・接合・記名・実測・トレース作業を能山真登加・楠みち子・長瀬文江・高田久栄・里見節子、図版作成を今井淳一、写真撮影を谷内碩央がそれぞれ分担した。
6. 遺構・遺物の挿図に対する指示は下記のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は掲載のスケールで示した。
 - (2) 方位はすべて磁北を示し、水平基準は海拔高を示している。
 - (3) 写真図版の遺物には通し番号を付し、本文中の挿図番号に一致する。
 - (4) 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、その他の土器類を白ぬきで示した。
 - (5) 遺構の略号はつぎのとおりである。
柱列 [SA]・掘立柱建物 [SB]・溝 [SD]・畝状溝 [SU]・その他の遺構 [SX]
7. 調査によって得られた資料は、羽咋市教育委員会が一括して保存管理にあっている。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関からご教示・ご協力をいただいた。以下にご芳名を記して深甚の謝意を表したい。(敬称略・順不動)
浜岡賢太郎 四柳 嘉章 小嶋 芳孝 北野 博司 木立 雅朗 川畑 誠
吉岡 康暢 宇野 隆夫 平川 南 南木 睦彦 山本 直人 善端 直
石川県教育委員会 石川県立埋蔵文化財センター 石川県埋蔵文化財保存協会
四柳町会 大町町会 酒井町会 下曾弥町会 金丸出町会
羽咋産業建設株式会社 上田石油株式会社 羽咋市歴史民俗資料館
9. 本報告のなかでの各種分析について、漆器の塗膜分析は四柳嘉章氏に、大型植物化石の同定は南木睦彦氏に、埴埴に付着した金属の鑑定は田口 勇氏(国立歴史民俗博物館教授)にそれぞれお願いした。
10. 本報告書を作成するにあたって、四柳嘉章・南木睦彦の両先生より玉稿を受けた。
11. 本報告書の執筆分担は、つぎのとおりである。
四柳嘉章 (石川県立輪島高校) 第6章
南木睦彦 (流通科学大学) 第7章
今井淳一 (羽咋市教育委員会) 第1～5章・第8章
12. 本書は、今井淳一が編集した。

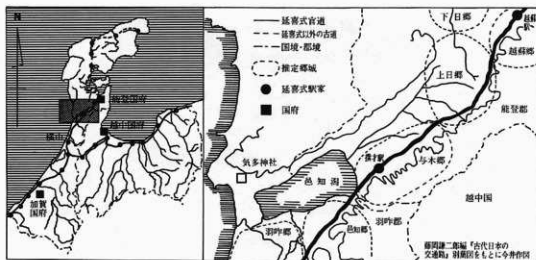
第1章 遺跡とその周辺

古代における能登国は石川県の北半部、日本海に大きく突き出た能登半島をその領域とし、養老二年（718）二月に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡が分離して一国の扱いをうけている（第一次立国）。そのなかでも最大の生活舞台としてあり続けているのが邑知地溝帯と呼ばれる細長い沖積地であり、半島基部南西端の羽咋から北東端の七尾まで平均幅約5km、長さ25kmの半島横断路として、各時代の文化形成に大きな役割をはたしている。

四柳白山下遺跡はこの地溝帯の中央部南寄りに位置し、旧邑知潟（干拓前）北東岸にあたる扇状地上に展開している。また、文献史料によれば、このあたりは古代の官道（駅路）に指定されており、加賀国の深見駅で北陸道の本路から支路が分岐して、地溝帯南側の石動山系丘陵の山麓沿いを北上していく道筋にあたっている。

さらに、『延喜式』巻二十八、兵部省の「諸国駅伝馬」条は加賀国の横山駅に続いて能登国に撰才、越蘇の二駅、各五疋を記しているが、このうち、撰才駅の遺称地とされているのが、現在の羽咋市余喜地区であり、『日本地理志料』や『石川県史』では式内社の餘喜比古神社が鎮座する大町および本遺跡が所在する四柳町周辺に撰才駅を想定している。余喜地区は『和名類聚抄』記載の能登郡与木郷に比定される地域で、年代的にはこの郷名の初見といわれる「越前国能登郡與荷里」と記された平城宮出土木簡に、和銅六年（713）と紀年銘が入っていることから、少なくとも律令体制初期の段階には、越前国に属しながらも地方行政の末端区画として編成されていたことがうかがわれる。また、能登における官道（駅路）設定の時期は明かではないが、前述した第一次立国の段階には機能しはじめたようである。

一方、平成元年（1990）に行われた本遺跡の第一次発掘調査からは、当時の状況を探る上で貴重な考古資料が得られている。特に、検出された三棟の掘立柱建物は三度にわたる同一地点



第1図 古代の遺跡周辺図

での建て替えであり、主軸方位が統一されたものであった。これらの建物の柱穴掘形や包含層から出土した土器の型式は8世紀前半代を示しており、律令体制下で能登国が第一次の立国をしたのち、天平十三年（741）に越中国へと併合され、天平勝宝九年（757）に再び分立（第二次立国）するという経過のなかで、与木郷域内にも集落が成立し存続していたことの積極的な傍証となっている。羽咋郡の郡家と能登郡の郡家および能登国府を結ぶ官道（駅路）沿いで、両郡の接点にあたる本道跡周辺は、古代の邑知地溝帯を考える上において注目される地域であり、考古資料と文献史料との一致が期待される地域といえる。

参考文献

- 『羽咋市史』 原始・古代編 1973 石川県羽咋市
 『鹿島町史』 通史・民俗編 1985 石川県鹿島郡鹿島町
 『七尾市史』 通史編 1974 石川県七尾市
 『古代日本の交通路Ⅱ・Ⅳ』 藤岡謙二郎編 1978 大明堂



掘りあがったSB01～03(第1次調査)

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 第2次調査に至る経緯

平成元年1月17日、上田石油株式会社（以下：上田石油）より羽咋市四柳町地内における個人及び給油所建築を目的とした開発計画が羽咋市教育委員会（以下：市教委）に提出された。

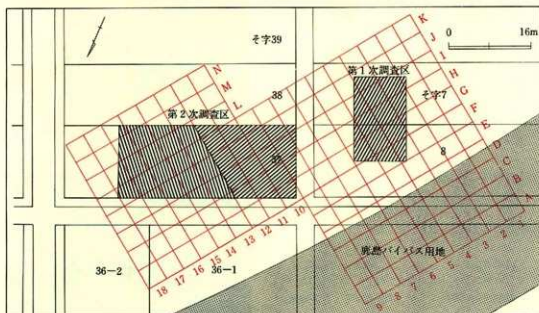
これは、上田石油の既存の住宅と給油所がいずれも国道159号鹿島バイパスの建設予定地内にかかったことから、上田石油がそれらの移転先を同バイパスのルート予定地に隣接する四柳町字6・7・1・8・1・36-1・36-2・37番地の現況水田耕作地に求めたことによるものであった。

開発計画を受けた市教委では1月18日と25日の2日間に分布調査を行い、開発予定地周辺に古代の遺跡（四柳白山下遺跡）が広がっていることを発見した。

ただちに上田石油をはじめ関連諸機関と発掘調査に関する協議に入った市教委は、移転契約の締結により建築計画が具体化していた宅地について緊急に第1次調査を実施することとし、給油所分に関しては上田石油と調査費用のねん出方法などの調整を行いながら、継続的に第2次調査として行っていくことを確認した。

調査ごとに記述すると、第1次調査は市教委が事業主体となり、文部省の補助金を受けて実施した。調査期間は平成元年4月10日から6月2日まで延べ33日間。調査面積は約200㎡であった。続く第2次調査は、引き続き市教委が事業主体となり、原因者である上田石油の負担分及び文部省補助金を受けて実施した。調査期間は平成2年5月8日から7月9日までの38日間、調査面積は約400㎡であった。

なお、調査区域・グリッド割等は第2図及び第3図のとおりである。



第2図 第2次調査区域図(1/750)

第2節 第2次調査の経過（日誌抄）

5月8日（火）小雨

本日より現地入り。バックホーによる調査区域の表土除去作業及び発掘機材の搬入を行う。

5月9日（水）晴

表土の除去とベルトコンベアーの搬入を行う。

5月10日（木）・11日（金）晴

バックホーによる表土除去作業を継続する。

5月14日（月）曇りのち雨

第4層の掘り下げ作業を行う。

5月16日（水）晴

調査区域全体、第4層及び第5層の掘り下げ作業を行う。渋谷利雄氏来跡。

5月17日（木）晴

第5層の掘り下げを継続。I 9区で配石状の遺構を検出。土器を多く含んでいる。

5月18日（金）曇り一時小雨

第5層の掘り下げ作業を継続する。

5月21日（月）曇りのち晴

グリッド9～10列（配石）を除く調査区域の第5層及び第6層の掘り下げ作業を行う。

5月22日（火）晴

第6層直上までの掘り下げ作業を継続。

5月23日（水）曇り時々小雨

第5層の掘り下げの結果、南北方向に走る欹状溝を数状検出。

5月24日（木）晴

配石遺構の写真撮影、欹状溝の平面図取り・掘り下げ・レベル記入・写真撮影を行う。

5月25日（金）晴

配石遺構周辺を除く、調査区域内の遺構検出作業を行う。泉文化課・谷内尾氏他1名来跡。

5月28日（月）晴

グリッド杭の打ち直しを行う。

5月29日（火）雨のち晴

調査区北・西・東壁面をそれぞれ削平・整理する。また、K～L列の第5層を掘り下げる。

5月30日（水）・31日（木）晴

I～L・11～16列グリッド間の第6層掘り下げと遺構検出を行う。市文化財保護審議会来跡。

6月4日（月）・5日（火）晴

遺構検出を継続するが、面が見ずらく作業難航。



5/9 調査前の供養



5/18 第5層を掘り下げる



5/30 市文化財保護審議会来跡



6/6 配石遺構を掘る

- 6月6日(水)晴
全体の遺構検出と配石遺構の掘り下げを行う。
- 6月7日(木)晴
配石遺構の平面図取りを行う。
- 6月8日(金)晴
調査区全体にわたる溝・ピット等の遺構を検出。
- 6月11日(月)・12日(火)晴
検出面での遺構の掘り下げ(半掘)作業を行う。
- 6月13日(水)晴
各遺構の掘り下げによって、溝に沿った形、あるいは溝内に柱筋を通す柱穴を確認。
- 6月14日(木)・18日(月)晴
遺構の掘り下げを続行。溝を巡らせた内で、掘立柱建物の柱穴と思われる遺構が認められる。
- 6月19日(火)晴
各遺構の掘り下げの他、配石より西側で第6層の掘り下げ作業を行う。
- 6月27日(水)曇り一時雨
配石遺構の断面削平作業及びI11区周辺の平面図取り、遺構面全体の整理作業を行う。
- 6月28日(木)曇り時々晴
昨日の作業を続行の他、配石の断面図を作成。
- 6月29日(金)晴
配石遺構周辺の掘り下げ作業及び掘立柱建物周辺の平面図取りを行う。
- 7月2日(月)晴
遺構検出作業の結果、配石と平行に走る溝を確認。平面図作成作業も続行。
- 7月3日(火)曇り
平面図作成作業を続行。
- 7月4日(水)曇り時々小雨
晴れ間をぬって、レベル記入作業を行う。
- 7月5日(木)曇りのち晴
検出遺構の全掘。遺構内遺物の取り上げ。柱穴に残る柱根の出土状況を断面撮影で記録する。午後より全体撮影を行う。
- 7月6日(金)晴
各柱根の取り上げ、調査区壁面の削平・整理を行い、続けてその断面図作成作業を行う。
- 7月7日(土)晴
断面図作成作業を続行。
- 7月9日(月)晴
発掘機材撤収。本日をもって現地調査終了。



6/14 掘立柱建物を掘る



7/5 溝を掘る



7/13 現地説明会 48名参加



8月 室内での遺物整理

第3章 第2次調査の概要

第1節 第2次調査区の設定

本遺跡の第2次調査は、平成元年1月18日と25日に実施した分布調査の成果をもとにして、調査区域を設定する作業からはじまった。

この分布調査の詳細については、第1次調査の報告書である『四柳白山下遺跡Ⅰ』で説明してあるので、ここではその結果を引用するだけにとどめておきたい。

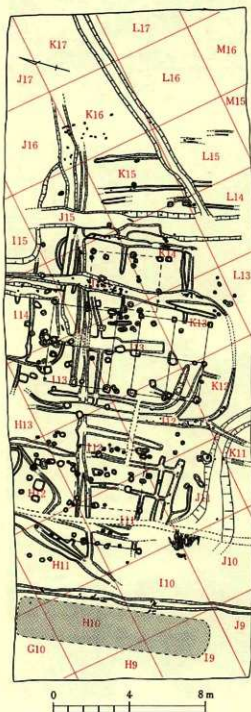
分布調査対象区域において、第1・2・7・10・11トレンチ周辺が給油所建設予定地に該当している。このうち、対象区域の最も低地となる第1・2トレンチでは遺物包含層を確認できなかったため、対象区域の南側で良好な遺存状態を保つ包含層が認められた第7・10・11トレンチ周辺を中心として発掘調査を実施することとした。

ただし、周囲を農道と農水路で囲まれているために調査区域外となる所が多く、実質調査面積は約400㎡となった。

発掘調査区の設定には、第1次調査と同じく国道159号鹿島バイパス予定地内のセンター杭(No.126・127)を基準に4m×4m方眼のグリッドを割り付けた。

第3図に示したように、南北方向にアルファベットを、東西方向にアラビア数字を付して呼称している。この座標が交差する点の名称を交点の東北側のグリッド名とした。

また、東西方向のグリッド割に対応する形で区域が二分されており、アラビア数字の9～12列間が原因者負担対象区域、同じく13～17列間が文部省補助対象区域になっている。そして、これらをまとめて第2次調査区域と呼んでいる。



第3図 第2次調査区グリッド割図(1/200)

第2節 土層の概要

遺跡は邑知地溝帯の中央部南端、碁石ヶ峰山地を開削して流れ出る地獄谷川などの小河川によって形成された小規模な扇状地の扇端部に立地している。そのため基盤は黄褐色系の砂質層であり、伏流水の湧き水が激しい所となっている。

この基盤砂層までの平均的な層位は、礫や鉄分を含む茶褐色土（第1a層）、礫を含む褐色土（第1b層）、淡青褐色細砂質土（第2層）、黒茶褐色粘質土（第3層）、茶褐色砂質土（第4層）、黄茶灰褐色砂質土（第5層）、そしてその下に奈良時代の整地層である黒灰色砂質粘土層（第6層）がひろがっている。

第1a層・1b層の土層中には礫石や中世から近世にかけての陶磁器類が含まれている。また、調査区全体に近代以降の暗渠排水の跡が何本も走っていたり、調査区東側の部分で自然堆積というよりも人為的に埋め込んだ堆積状態を示している箇所や削平された箇所が顕著に認められた。

第6層全体の堆積状況は、調査区の東西方位にあたるG10～J17区間北壁のセクションで、標高14.5～14.7mと平均的な厚さ20～30cmでほぼ水平に堆積している。調査区南側のセクションは湧き水により崩壊したため記録としては残せなかったが、現地調査時の平面的な様相及び次に述べる東壁・西壁の南側での標高がそれぞれ15.2mと15.4m前後であることから、北壁と同様の傾向であったと判断できよう。

また、水平状態の東西方位に対して南北方位にあたるI9～G10区間のセクションでは、平均的な厚さ20～30cmながら南側で標高15.2m、北側で14.6mと約12m間隔で60cm前後の落差をもって堆積している。M17～J17区間東壁での傾向もこれと同様であり、第1次調査の成果とあわせれば、奈良時代の整地層は厚さ20～40cmで邑知地溝帯の南東山麓側から地溝帯渦側沖積地へ、方位的には南から北へ向かって約5度の傾斜で、北に向かうにつれて徐々に薄くなりながら層向していたと想定できる。

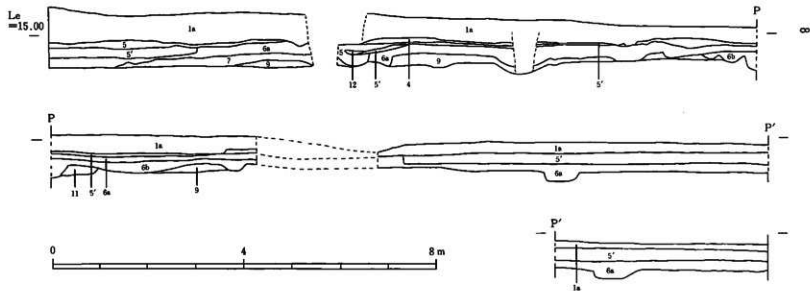
遺構の大半はこの整地層から掘り込んでいるため、第4層までをバックホーによって除去し、整地層上面である第5層以下を人力で掘り下げて遺構検出を行った。

しかし、先にも述べたように後世の攪乱層や検出面自体の複雑さなどが相まって、整地層での遺構検出は極めて判断がむずかしく、欽伏溝や配石遺構などを検出した以外、大部分は基盤砂層までを掘り下げて確認した。

第1表 土層分類表

第1a層	茶褐色土（礫、鉄分含む）
第1b層	褐色土（礫含む）
第2層	淡青褐色細砂質土
第3層	黒茶褐色粘質土
第4層	茶褐色粘質土
第5層	黄茶灰褐色砂質土
第6a層	暗黒灰色粘砂質土
第6b層	明黒灰色粘砂質土
第6c層	黒茶灰褐色粘砂質土
第7層	黄褐色砂質土
第8層	暗灰褐色土（炭化物混入）
第9層	淡青灰色粘土（炭化物混入）
第10層	黒灰褐色砂質土
第11層	灰褐色砂質土
第12層	灰褐色、茶褐色混合砂質土

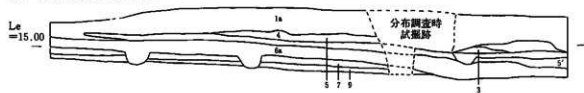
G10～J17区間北壁のセクション



M17～J17区間東壁のセクション



I9～G10区間西壁のセクション



第4図 調査区土層断面図(1/80)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要

第2次調査区のほぼ全域にわたって奈良時代の遺構を検出した。発見したおもな遺構には、掘立柱建物4棟以上・素掘りの溝17条・柱列1条・配石1基・畝状溝6条などがある。

これらの遺構は、何回もの建て替えによって複雑に重なりあった状態で見つかっているが、全体的には奈良時代前半を通して営まれた集落の一部を構成している。

また、建物・柱列のすべては掘立柱構造である。したがって、以下の記述においては、単に「建物」と称することとし、特に掘立柱であることをことわらない。

遺構の全般的な分布は、調査区を南北方向に貫通する溝SD01と溝SD16の間にはさまれた区画内で、溝によって囲い込まれた建物が集中する傾向が認められる。この東西距離20m程度の区域では、次に述べる建物4棟分の他に、11箇所の柱根をとどめる柱穴を検出しており、柱筋の一部として当てはまるものが多いことから、実際には未検出の建物あるいは柱列が数棟単位で存在しているものと推定される。

溝SD016以東は溝のみの検出で、密度が薄くなるようだが、調査区外の東側部分を分布調査時に試掘した際（第11トレンチ）、良好な遺存状態を保つ包含層を確認していることから、遺跡としてはさらに広がっていることが予想される。

溝SD01以西では、SD01に近接し、並行する形で配石SX02を検出している。南北方位で大量の遺物を含んでおり、さらに西側で第1次調査の際検出した東方位のSX01との関連性が高いと考えられる。

遺構の記述にあたっては、溝・建物・柱列・配石・畝状溝の順に記述したが、有機的な関係を有し、一連の遺構と考えられる建物とその周りをめぐる溝に関してはまとめて報告した。

第2節 各 説

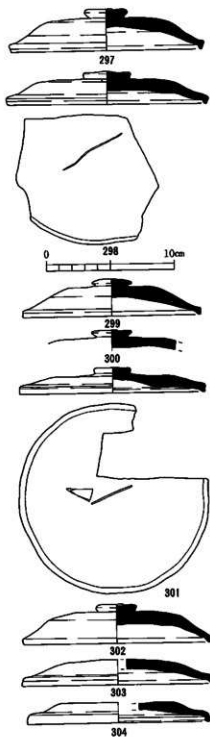
(1) 溝 [SD01～17]

SD01

調査区西側に位置する南北溝である。両端はそれぞれ区域外へと続いているが、配石遺構であるSX02と並行して流れ、近接していることから、様相の異なる第1次と第2次調査区の空間を区画する溝であった可能性も考えられる。溝幅は50cm、深さ20cm、検出総延長12m以上を測る。埋土からは曲物の底板（第13図 20・21）や棒状の加工木片（第13図 15・16・40・43・46・48）といった木製品及びクルミやモモの核4点など出土がしており、木製品のなかには全面が焼けているものもみられる。

SD02

H11区を中心として南西から北東に走る斜行溝。溝幅は60cm、深さは最深部で18cmを測るが、南西へ行くほど浅くなり、I10区で途切れている。



第5図 SD01～17出土土器
実測図1(1/3)

SD06

L14区で検出した南北溝。溝幅は20cm前後で、北端をSD17に切られている。以下に記述するSD07～11に関しても、浅い溝としての形状は同じであり、SD17との切り合い関係が生じている。SD06の埋土からは土師器の鍋片が1個体分(第11図 353)とクルミの核が3点出土している。

SD07

K15区で検出した南北溝。浅いため一部が途切れているが、L14区内北東端でSD06と接する。

SD08

L～K15区内で検出の南北溝。埋土より墨書土器1点(第9図 336)とクルミの核2点が出土している。

SD09

K15区内でSD17から北へ3.3mを検出した南北溝であるが、南側は未検出であった。埋土より須恵器の有台環(第7図 311)が出土している。

SD10

L15区内でSD17より南で70cmのみ検出の南北溝。埋土より須恵器の有台環(第7図 316)が出土している。

SD11

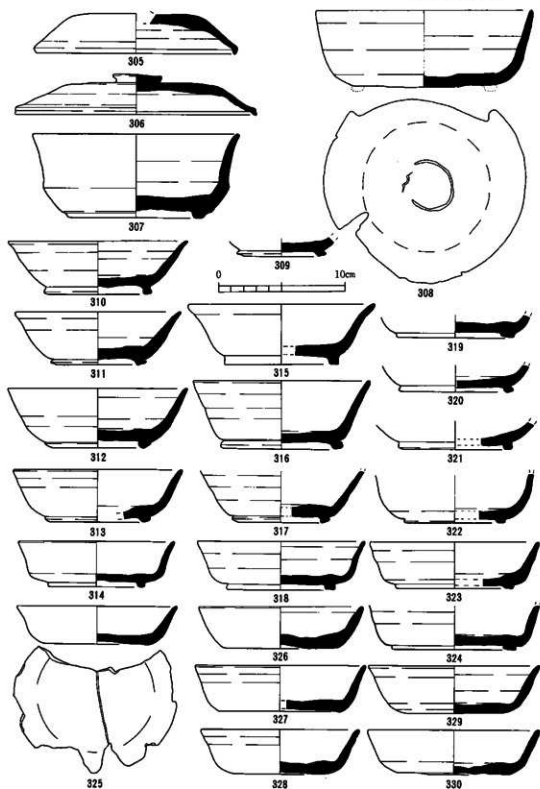
前述のSD10から東へ20cmと近接した位置で検出。SD06～11のなかでは最も東端にあたる。

SD12

H12区内から調査区外の北へ流れるL字状の2条の溝。分岐する形で後述するSD04のように建物と関連する可能性も考えられるので、それぞれ12-1・2と枝番号を付した。SD12-2はH13区内でSD03-5に切られており、SD12-1の埋土からは大形の舟形木製品(第13図33)と思われる加工木片が出土している。

SD13

検出総延長21m、溝幅20～45cm前後を測る東西溝



第7図 SDO1~17出土土器実測図2(1/3)

であるが、I 12・J 14 区間にそれぞれ分岐点がある。溝底の標高は調査区の西と東で、西の方が約15cm高く、分岐点の形状とも合わせ、水は西から東へ流れていたと推定される。また、SD04-1・16に切られている。埋土からは須恵器・土師器・有孔木製品（第14図49）のほか、クルミ・モモの核7点が出土している。

SD 14

前述SD 13の北側を平行して流れる東西溝。切り合い関係によりSD04-1・16よりも古いが、同じく交差するSD 05やSD 15との時期関係は確認できなかった。流れが途切れるJ 16区内で、遺物の溜まり部分があり、「東家」及び「忍人」と書かれた墨書土器（第9図333・335）・ヒキリ板（第13図35）や棒状・板状の加工木片（第13・14図36・44・47）・クルミ・モモの核8点などが出土している。

SD 15

後述するSD 04と同様、建物の周りをめぐる形になると思われる。検出できたのは1条の南北溝から2条の溝が東へ湾曲しながら分岐する部分であり、東側はSD 04・05によって切られて不明である。埋土からは須恵器・土師器の小片のみであったが、溝で囲まれた部分にあたるI 14区内の包含層から、「倉富女」と記された墨書土器（第9図582・584）が2点出土している。

SD 16

調査区東側に位置する南北溝である。検出総延長11m、溝幅は55～110cm、深さ15cm前後を測り、溝底は平坦である。SD 13・14をJ 15区内で切っている。埋土からは須恵器・土師器のほかに、ヒキリギネ・刀形の可能性が考えられる木製品（第13図34・41）や板状の加工木片（第14図31・38・41・45・50）・クルミ・モモの核3点などが出土している。

SD 17

I 14区内でSD 16の東肩から北東に走る斜行溝。検出総延長12.5m、溝幅70～80cm、深さ15～18cmを測る。SD 16と同時存在であるかは確認できなかったが、SD 06～09より新しい。

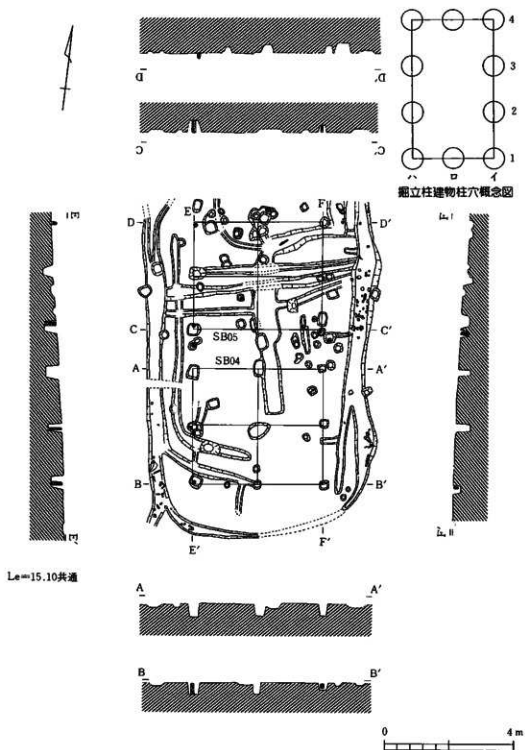
(2) 建物 [SB04～07]

SB04・SD04

調査区の中央部に位置する東西2間（4.16m）、南北2間（3.56m）の東西棟の縁柱建物である。桁行（東西）方向の柱間は208cm等間、梁間（南北）方向の柱間は178cm等間である。

柱掘形は東側柱列が一辺30cm前後と小さいながら隅丸方形で整っているが、その他は不揃いで一辺25～60cmの略方形ないし不整形である。柱穴の深さは25～40cmで2箇所柱根が残る。1箇所は柱穴ハ1で柱直径が7cm、もう1箇所が柱穴ハ2で柱直径がやはり7cmと細いものである。推定床面積は14.8㎡、建物の主軸N-10°-Wを測る。

なお、東柱と思われる柱穴ロ2は50×65cmで不整形であるが、柱穴はハ2と同様に検出には至らなかった別の建物の柱穴と重複しているためと判断している。



SB04と後述するSB05は南北方位に柱筋を描いて並び建っていたと推定されるが、それらの建物を囲むように溝SD04が検出された。前後関係が不明のため、建物周辺を交差・分岐する溝の総称をSD04とし、さらに方位に応じて1～6までの枝番号を付した。

最も外周にあたるSD04-1は、SB04の南側柱列に沿って弧状に湾曲しながら建物の架間(南北)方向を並行に流れており、溝の中心線(主軸)と建物の柱列との距離は西側と東側でそれぞれ120cm前後と平均している。この南北に走る部分で幅50～70cm、深さ10～20cmを測るが、湾曲部分では狭くなり幅10～20cmとなる。

また、SD04-1で囲まれた区画内には分岐する形でSD04-2・3・6が検出されたが、同時存在か否かは確認できなかった。溝底の標高が北と南では約35cm南の方が高いことから、水の流れは、調査区外の南側からSD04-5を通り、J12区内でSD04-1に注ぎ込まれ北へ流れていたと考えられる。

SD04-1の溝内には2箇所の遺物溜まりが認められた。1箇所はJ14区内のSB05と並行する部分で、須恵器の墨書土器3点(第13図 331・332・334)・土師器の甕(第11図 354)・完形品3点を含む箸状木製品12片(第13図 1～12)・曲物材4片(第13図24～27)・陽物状の製品1点(第13図14)・クルミ・モモの核11点などが出土している。もう1箇所はJ・K12区内で、須恵器・土師器のほか板状や棒状の加工木片(第13図13・19・28・29・32・39)などが出土している。また、この地点では溝内の土層観察をした際に、植物化石の存在を肉眼で確認できたため、溝内から約8kgの土壌をサンプリングし、水洗選別による植物化石の検出と同定作業を行っている。同定結果については、南木睦彦氏による報告を第7章に掲載した。

SB05・SD04

先に記述したように、SD04-1に囲まれた区画内でSB04の北に120cm隔てて並ぶ建物である。東西2間(4.14m)、南北2間(3.50m)の東西棟で、東柱は検出できなかったが、SD05に切られている点や隣接するSB04との関連などから総柱建物の可能性が高いと考えられる。桁行(東西)方向の柱間は207cm等間、架間(南北)方向の柱間は175cm等間と、復元柱間寸法はSB04よりもわずかに小さくなっている。柱掘形は一辺25～45cmの隅丸方形ないし不整形であり、柱穴イ1・ハ1・ハ3の3箇所に柱根が残っている。柱直径はそれぞれ11cm、7cm、11cmを測る。

建物の推定床面積は14.49㎡、主軸方位がN-10°-Wで架間(南北)方向の西側柱列がSB04のそれと同一線上に位置している。

SB06・SD05

調査区の中央部東寄りに位置し、柱間寸法が不揃いではあるが、柱筋が南北方向に一定である点や、溝で区画された空間内に柱根を遺存する柱穴が集中する点などから、建物として扱った。復元規模は東西1間(2.72m)、南北2間(3.57m)で、推定床面積9.71㎡、主軸方位がN-13°-Wを測る南北棟になる。ハ1にあたる柱穴は精査したが検出できなかった。桁行(南北)方向の柱間は東側柱列で北より、214cm、143cm。西側柱列で北より185cmである。架間

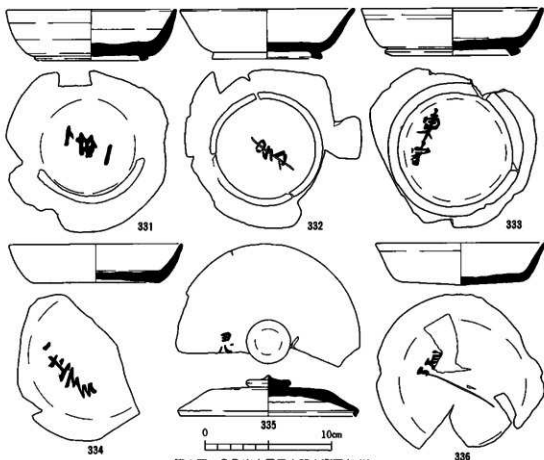
(東西)方向の柱間は北側で272cmを測る。柱掘形は一辺30cm前後の隅丸方形ないし20~30cmの不整形なものであり、深さは20~35cmを測る。柱穴イ2・ロ2には柱根が残っており、柱直径がそれぞれ9cm、8cmと細いものである。

SB06から西へ約170cm隔ててSD05が位置している。J13区南端に始まり、I14区内でクランク状に蛇行して調査区外の北へ流れ込んでいられると思われるが、排水機能のほかに建物を区画する溝の可能性も考えられたため、ここで扱った。溝幅は60~80cmで、深さは南で15cm、北へ行くほど深く、I14区内では約35cmとなる。溝の中心線(主軸)はSB06の主軸方位と同一である。東西方位で交差するSD15-2を切っているが、SD04-6・13-1・2・15-1に関しては切り合いを確認できなかった。

SB07・SD03

前述したSB04~06は、それぞれSD03-1・SD05とSD04-4あるいはSD04-3とSD04-4で区画された空間内に集中する柱穴から復元できた建物である。これらと同様の傾向を示しているのがH~J区グリッド間であり、SD03で区画された空間にSB07が位置しているが、この他にも検出には至らなかった別棟の建物の存在が予想される。

SB07の復元規模は東西2間(3.12m)、南北2間(3.50m)で、推定床面積は10.92㎡主



第9図 SD出土土器土器実測図(1/3)

軸方位がSB06と同じくN-13°-Wを測る南北棟になる。

梁間(東西)方向の柱間は156等間である。桁行(南北)方向の柱間寸法は東側柱列で北より110cm、240cm。西側柱列で北より205cm、145cmと不揃いである。柱掘形は一辺30cmの隅丸方形ないし円形を呈し、深さは25~40cmを測る。柱穴イ2・イ3・ロ3・ハ1の4箇所に柱根が残っていた。柱直径はそれぞれ9cm、10cm、10.5cm、10cmと平均している。梁間(東西)方向北側柱列であるイ3・ロ3の柱根は片側面から底面までを斜位に削って尖らせた形態であり、SD13-1を切って建てられている。

また、建物と関連する遺構として扱ったSD03はSD04-1のように明確な構成単位を示していない。南北及び東西方向に走る溝の一群をSD03と総称したもので、いずれも溝幅20~45cm、深さ5~12cmの浅い素掘りの溝である。最も西側を流れるSD03-1は近代の暗渠排水によって切られているため、断定はできないが、J11区内から始まり、西へ弧状に湾曲しながら南北溝として調査区外の北へ流れていたと推定される。SD07との間隔は、西側柱列と約120cm、南側柱列と約150cm平均の距離である。

SD03-2は南端で湾曲する溝で、SD03-1に合流する形をとる。SD03-3・4は東西溝であり、SD03-3は建物の南側柱列よりさらに約80cm南に、SD03-4は南側柱列上に位置している。また、柱穴ハ1はSD03-4を切って掘られている。

SD03-5・6はJ11区内のSD03-1から分岐する南北溝で、SD03-5はSD13-1と合流し、SD03-6はさらに調査区外へと流れている。SD03-7最も東側を流れるは南北溝で、建物の東側柱列とは東へ50~80cm、SD04-1とは西へ約110cm離れた位置にある。

なお、SD03-1は前述したSD04と同様に、植物化石の検出と同定を目的とした土壌のサンプリングを実施した地点である。(第7章参照)

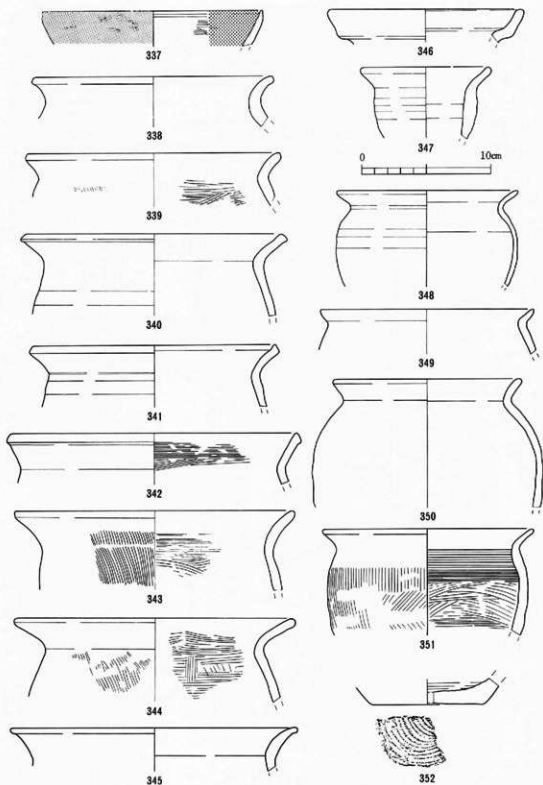
(3) 柱 列

SA03

調査区西側で配石SX02とSB07及びSD03との間に位置する南北3間の柱列である。柱間の寸法は北より125cm、120cm、176cmを測る。

柱掘形は一辺25~35cmの隅丸方形ないし不整形なものであるが、SD02を切って掘り込まれている柱穴イ4は掘形を確認できず、柱根のみの検出であった。このほか柱穴イ1・イ3にも柱根が残っており、柱直径はそれぞれ11cm、13.5cm、14cmを測り、調査区で検出した建物の柱よりもひとまわり太いものとなっている。

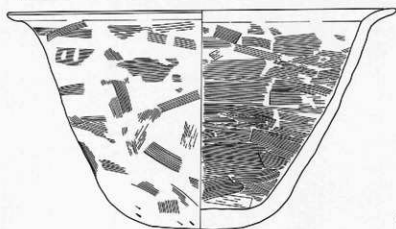
方位はN-13°-Wで、近接するSB07ではなく、SB04・05と同じである。SD03で囲まれた区画内にはSB07と重なる形で別棟の建物の存在が想定できることから、同方位で配置された未検出の建物の西を画する屏の可能性も考えられる。



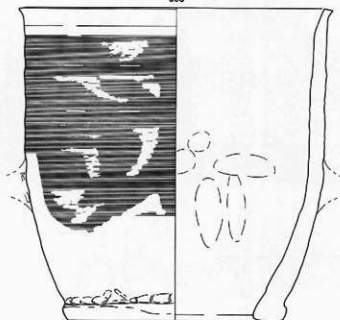
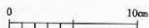
第10図 SD出土土師器実測図1(1/3)

第2表 建物計測表

建物 番号	柱間 (梁×桁)	柱間寸法		桁長	梁長	床面積	方 位	掘 形 規 模
0 4	2×2	2.8	1.78	4.16	3.56	14.8	N-10°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)
0 5	2×2	2.7	1.75	4.14	3.50	14.49	N-10°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)
0 6	1×2	2.72	—	2.72	3.57	9.71	N-13°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)
0 7	2×2	—	1.56	3.50	3.12	10.92	N-13°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)



353

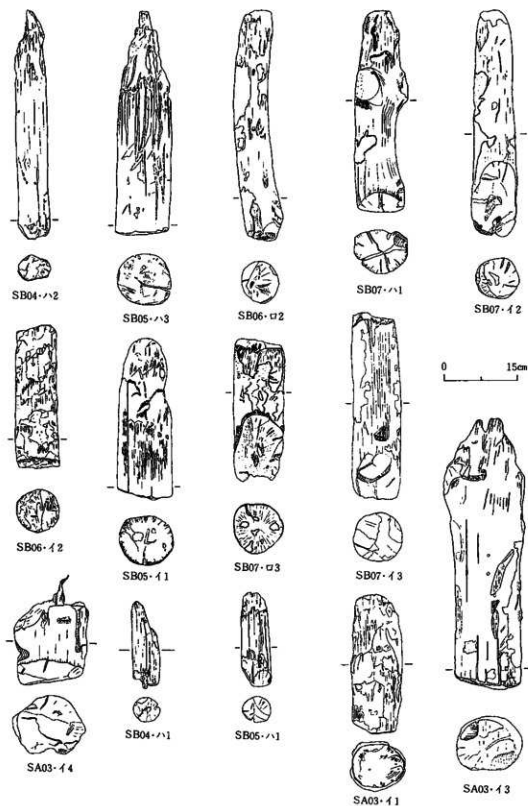


354

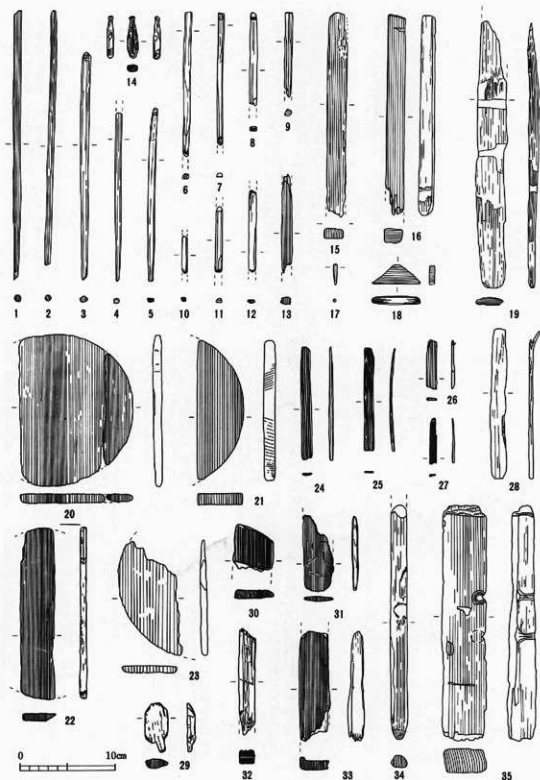


355

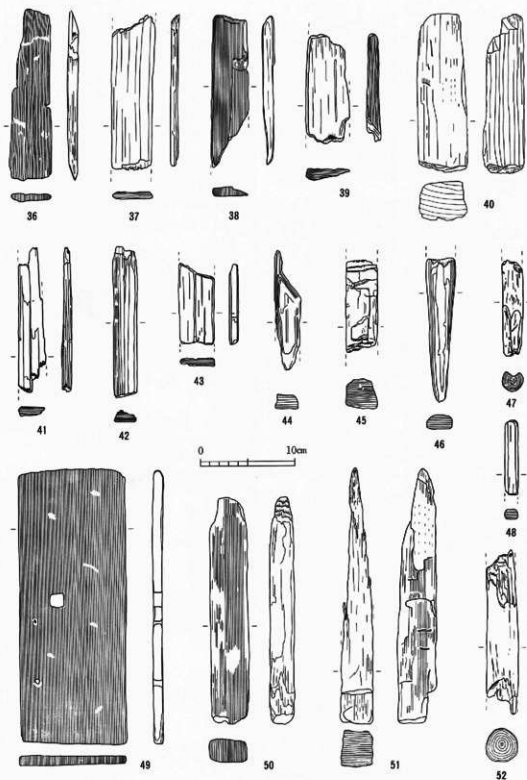
第11図 SD出土土師器実測図2(1/3)



第12図 柱根実測図(1/8)



第13図 SD出土木製品実測図1 (1/4)



第14図 SD出土木製品実測図2(1/4)

(4) 配石遺構

SX02

調査区の西端で検出した南北方位の配石遺構である。全体の形状はI 9・10区内を南端として、幅2 m前後で帯状に北へ続いている。検出総延長は10 mであるが、G 11区壁面の土層観察によりさらに調査区外の北にのびていくことが確認できる。検出面での標高は北と南で、南の方が約25高くなっている。

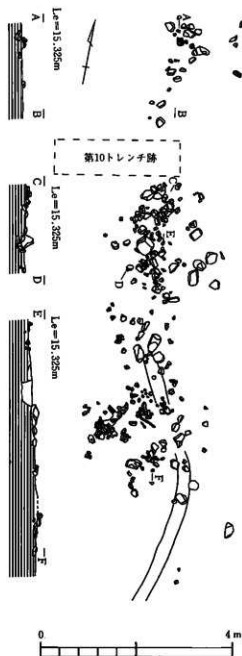
また、SD 01をはさんで東側の建物や溝が集中する遺構検出面とは約40 cm前後、SX 02の方が高くなっている。

配石内は最大径30 cm程度の様々な形態の礫や比較的小振りの礫で構成されている。H 10区北側を分布調査時の試験孔(第10トレンチ)が、加えて南側を近代の暗渠排水が横断しているために、遺存状態は必ずしも良いとはいえないが、ほぼ完形に復元できる須恵器の長頸壺(第19図429・431)をそれぞれ出土したI 9・10区内及びG 11区内はさらに小さな構成単位として、それぞれ一辺150 cm、100 cm前後で内部に空間をおく方形プランになる可能性がある。

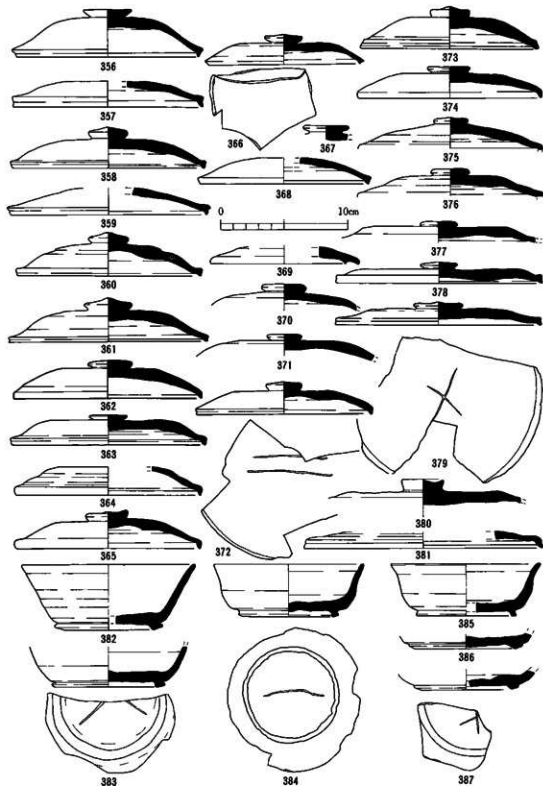
同様にH 10区内でも北から一辺70 cm、50 cm、100 cm前後の方形プランが重なりあっているような検出状況であるが、プランとしては全体にくずれている点や、前述した攪乱箇所もあって断定はできない。

配石の南北の両端にあたるI 9区内からG 11区内までの全体を通した主軸はN-10°-Wで建物及び南北溝の方位と近似あるいは同一のものとなっている。

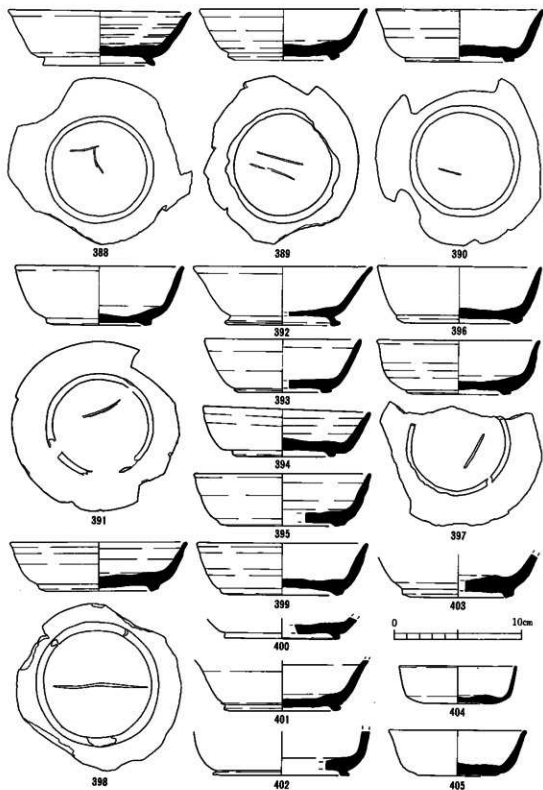
配石内部及びその周辺からは多量の須恵器・土師器片・「忍人」と書かれたものやそのほか判読不能の墨書土器6点・焼土塊2片・木片などが出土している。



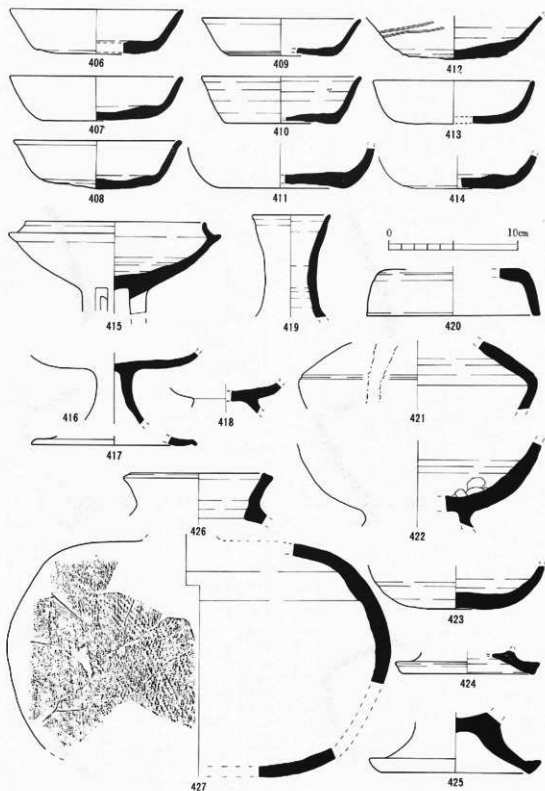
第15図 SX02実測図(1/120)



第16図 SX02出土須恵器実測図1 (1/3)



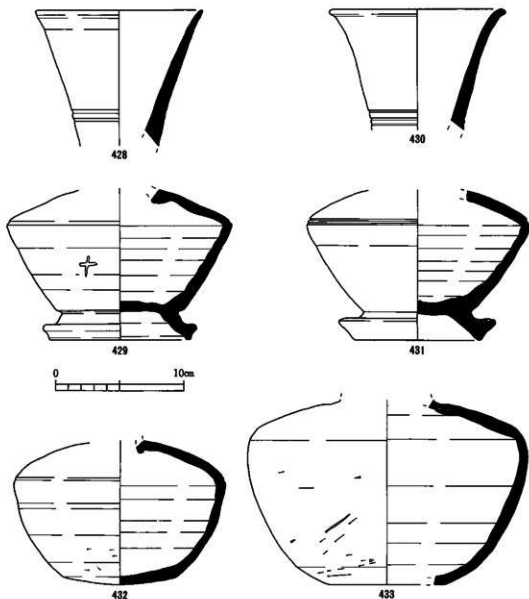
第17图 SX02出土须惠器实例图2(1/3)



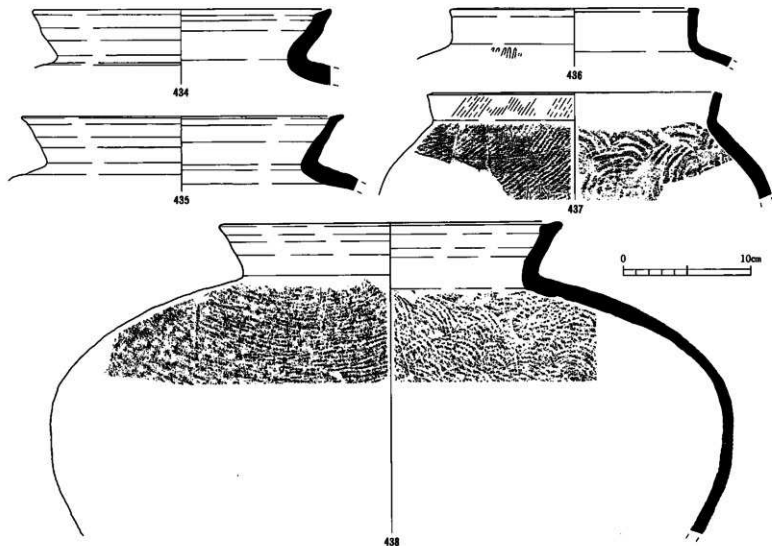
第18図 SX02出土須恵器実測図3(1/3)

配石内土層断面の観察では、規則的に積まれていたり、礫の上端部が水平位に置かれたような状況は認められず、二次的火熱を受けた礫もI 9区内で数個が確認できた程度であった。

以上、SX02の概要を記したが、その正確については決定的な判断資料は得られていない。第1次調査で検出したSX01と合わせていくつかの特徴を記してみると、走行の方位の違いはあるが、幅1.5～2mの列石が連続的に、方向を決めて直線的にのびている点、加えてSX01からは円面硯・フイゴの羽口が、SX02からは墨書土器など遺跡の性格の一端をうかが



第19図 SX02出土須恵器実測図4(1/3)



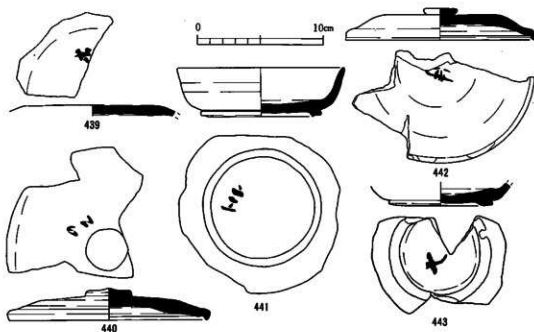
第20図 SX02出土須恵器実測図5(1/3)

わせるような遺物をはじめ、8世紀第2四半期を中心として第1四半期から第3四半期に比定される須恵器・土師器などの遺物が相当量含まれている点などがあげられる。

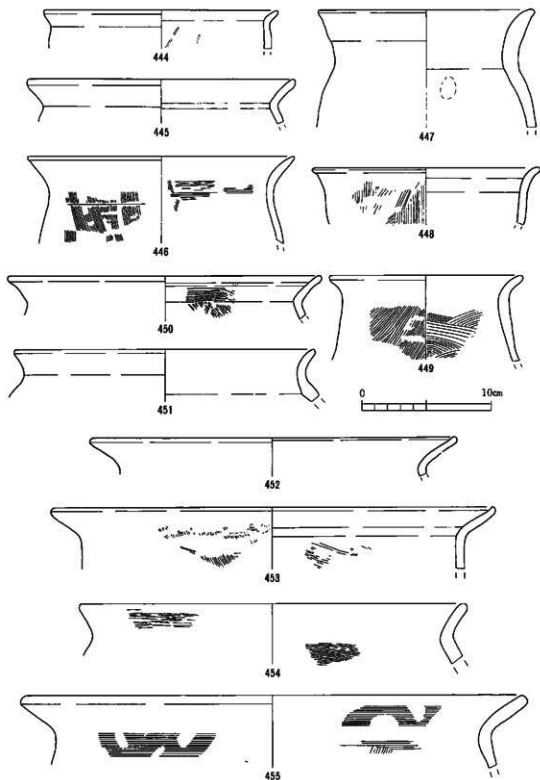
これは遺跡内で現在までに判明している奈良時代に営まれた集落存続の時期全般にわたるものである。

次に建物との配置関係で見ると、東西方位のSX01の南側とSB02の北側柱列とは、並行して約5m離れた位置関係にある。続いてSX02の東側とSB07の西側柱列の距離は並行して約4.5m離れている。さらにSB04を囲む溝SD04-1とSX02の南端がほぼ東西方位の線上にのっている。

これらの点から、SX01・02を計画的に配置された集落内の施設としてとらえ、その性格のひとつとして建物を中心とする空間を区画する機能を想定しておき、今後の類例の増加をまってさらに検討を加えていきたい。



第21図 SX02出土壱部土器実測図(1/3)



第22図 SX02出土土師器実測図1 (1/3)

(5) 畝状溝

SU14~19

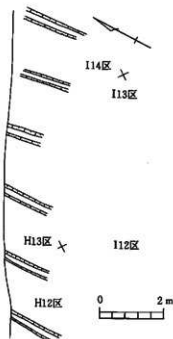
調査区北端にあたるH12~I14区内で検出した南北方向に走る畝状の溝を、その性格の上から一括して報告しておきたい。

これらはいずれも奈良時代の包含層(第6層)の上面に掘り込まれており、今回の調査で確認できた古代の最も新しい遺構といえる。

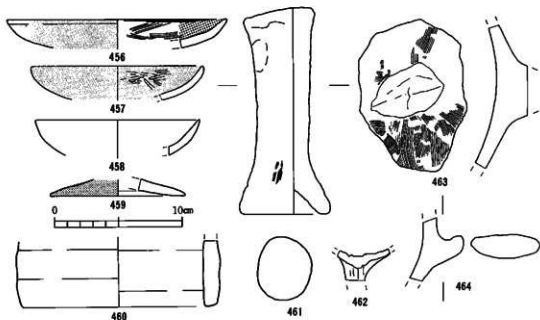
溝幅は20~30cm、深さは5~15cm前後が平均的で、並行している溝間の距離(畝幅)はそれぞれ1.6~1.9m前後の範囲にまとまっている。

また、各溝の長さは北側が調査区外のために未検出であり、加えて南側は後世の削平によって一様に途切れている状態のため、調査区北側から1.5mから2m前後を計る短いものであった。

出土遺物は須恵器・土師器の細片が少量で時期を特定できるものはないが、SU14~19の方が第1次調査で検出したSU01~13の方位と同じく、N-5°~10°-Eの間にまとまっているほか、前述した立地条件・溝の形状・規模・溝間距離に類似性が見いだせることから、生活面としての建物などが廃絶した奈良時代中葉以降につくられた畑の畝にとまう遺構と推定している。



第23図 SU14~19実測図(1/120)



第24図 SX02出土土師器実測図2(1/3)

第5章 出土遺物

今回の調査で検出した遺物には、須恵器・土師器・墨書土器・木製品・石製品・製塩・鍛冶関係の遺物などがある。これらの大半が奈良時代のものであるため、ここでは浅い素掘りの溝(SD)・配石遺構(SX02)及び包含層出土物の説明を中心に記述を進め、総合的な評価は第8章のまとめで行うことにしたい。また、説明の都合上、同じ器種での分類は『四柳白山下遺跡I』で抽出した分類に準じている。

(1) 須恵器

坏蓋 (第5・7・9・10・16・21・25図)

総点数で24点以上が出土しており、次に述べる有台坏と1器種としての点数が揃っている。

第3表に示したように、口径14cm代と15cm代のものが主体となっている。このなかでは、偏平なボタン形つまみ径3cm、器高3cm前後、天井部が平坦面をもつ平笠形と天井部からなだらかに口縁端部へ移行する笠形の器形に分化する坏蓋B2類の出土量が多く、その先行的形態と思われるB1類、つまみも体部も偏平なC類も一定量認められる。

また、天井部はすべて回転へら削りが施されており、口縁端部の形態には断面が三角形を呈するタイプ、端部を外方につまみ出すタイプ、端部を折り曲げるタイプなどがあるが、断面三角形のものが圧倒的に多い。

このほかに、口径18cm代で宝珠形に近い上面が平坦なボタン形つまみをもち、口縁端部を短く外屈させるD類(380・381)、口径13cm以下で内屈返りをもつA類や端部を折り曲げたり、内屈させるE類が少量認められる。

有台坏 (第7・9・16・17・21・26・27・30図)

総点数で24点以上が出土しており、須恵器のなかに占める比率は34%と食膳具のなかでは最も量が多い。第4表に示したように、口径12~15cmの間に量的なピークがある。形態的な特徴

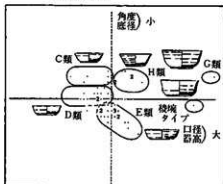
第3表 須恵器坏蓋・口径分布

器種の番号 = 1 器種の名称 = ... 口蓋		データの集 = 57			
品上 / 品下	品名 (器種) 0	10	20	30 程度	
11. 123400/	11. 497700	-3.00	-	-	0
11. 497700/	11. 498400	-3.70	-	-	0
11. 498400/	12. 221400	-3.40	-	-	0
12. 221400/	12. 244000	-1.20	-	-	0
12. 244000/	12. 997000	-1.80	-	-	2
12. 997000/	13. 317000	-1.30	-	-	1
13. 317000/	13. 483000	-1.30	-	-	1
13. 483000/	14. 041000	0.00	-	-	0
14. 041000/	14. 421000	-0.60	-	-	11
14. 421000/	14. 777000	-0.30	-	-	2
14. 777000/	15. 142000	0.80	-	-	10
15. 142000/	15. 907000	0.30	-	-	10
15. 907000/	15. 473000	0.60	-	-	4
15. 473000/	16. 237000	0.90	-	-	3
16. 237000/	16. 607000	1.20	-	-	0
16. 607000/	16. 917000	1.70	-	-	0
16. 917000/	17. 323000	1.80	-	-	0
17. 323000/	17. 697000	2.10	-	-	0
17. 697000/	18. 047000	2.70	-	-	1
18. 047000/	18. 427700	3.00	-	-	1

第4表 須恵器有台坏・口径分布

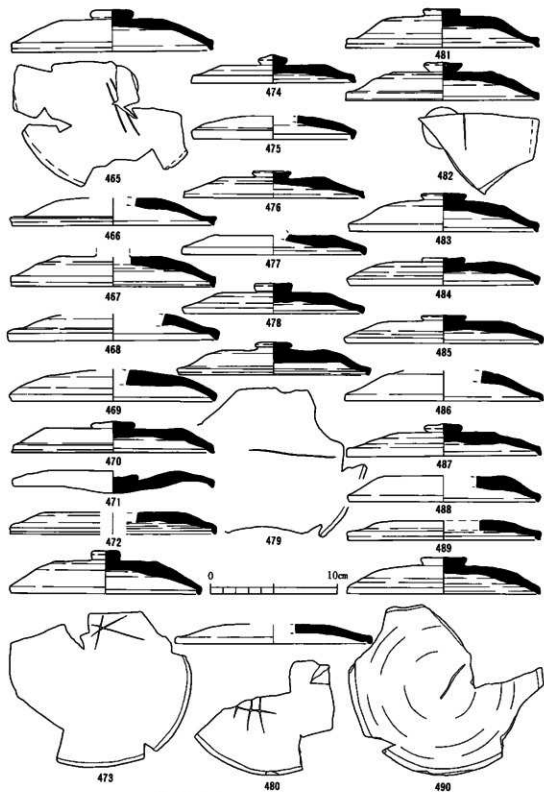
器種の番号 = 1 器種の名称 = ... 口蓋		データの集 = 55			
品上 / 品下	品名 (器種) 0	10	20	30 程度	
10. 179200/	10. 179200	-3.40	-	-	0
10. 179200/	10. 440000	-2.70	-	-	0
10. 440000/	11. 171000	-2.40	-	-	0
11. 171000/	11. 703000	-3.10	-	-	2
11. 703000/	12. 433000	-1.80	-	-	1
12. 433000/	12. 440000	-1.70	-	-	0
12. 440000/	12. 499000	-1.20	-	-	4
12. 499000/	12. 827000	-0.70	-	-	4
12. 827000/	13. 150000	0.40	-	-	4
13. 150000/	13. 487000	0.30	-	-	8
13. 487000/	13. 812000	0.60	-	-	4
13. 812000/	14. 100000	0.70	-	-	12
14. 100000/	14. 477000	0.40	-	-	4
14. 477000/	14. 810000	0.90	-	-	2
14. 810000/	15. 141000	1.20	-	-	1
15. 141000/	15. 477000	1.30	-	-	0
15. 477000/	15. 802000	1.60	-	-	1
15. 802000/	16. 130000	2.10	-	-	0
16. 130000/	16. 444000	2.60	-	-	1
16. 444000/	16. 795000	3.20	-	-	0

第5表 須恵器有台坏・主成分分析による2次元散布

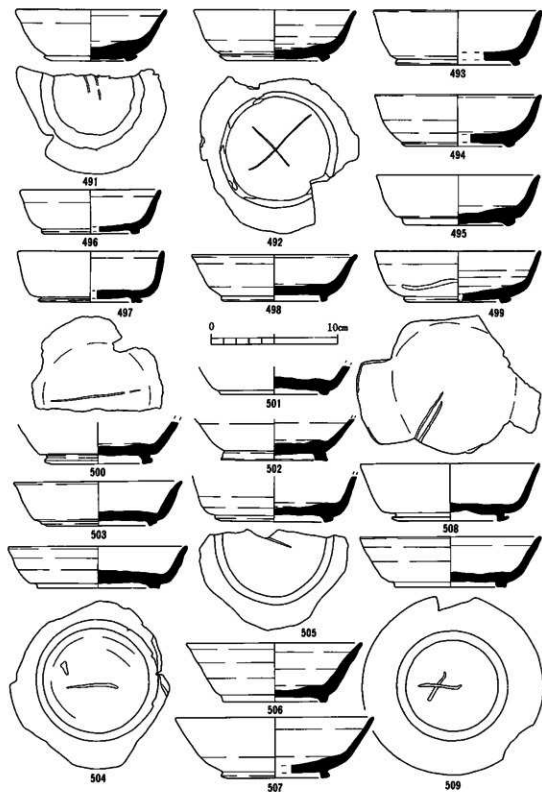


第6表 須恵器無台坏・口径分布

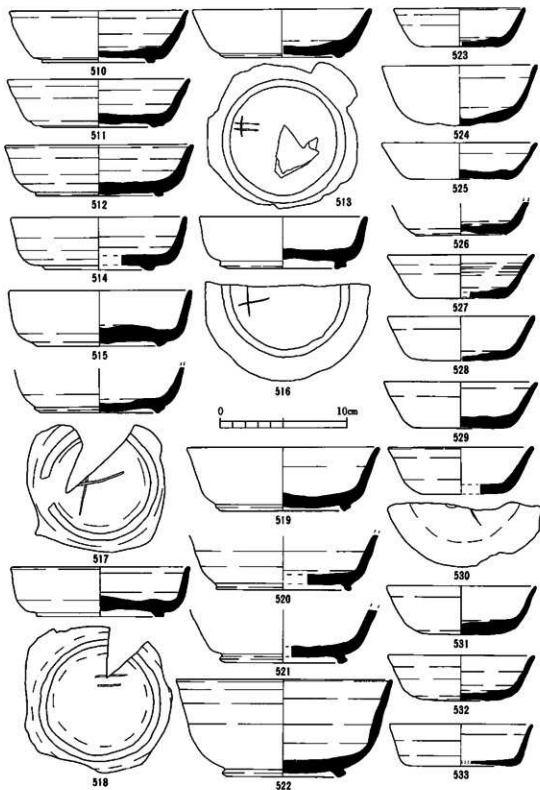
口径の範囲		データの数 = 33		10	30	30 前後
以上	以下	数	割合			
9.520000	9.528000	1	3.030303	-	-	1
9.528000	10.137000	5	15.151515	-	-	5
10.137000	10.445000	2	6.060606	-	-	2
10.445000	10.753000	2	6.060606	-	-	2
10.753000	11.061000	1	3.030303	-	-	1
11.061000	11.369000	1	3.030303	-	-	1
11.369000	11.677000	1	3.030303	-	-	1
11.677000	11.985000	1	3.030303	-	-	1
11.985000	12.293000	1	3.030303	-	-	1
12.293000	12.601000	1	3.030303	-	-	1
12.601000	12.909000	1	3.030303	-	-	1
12.909000	13.217000	1	3.030303	-	-	1
13.217000	13.525000	1	3.030303	-	-	1
13.525000	13.833000	1	3.030303	-	-	1
13.833000	14.141000	1	3.030303	-	-	1
14.141000	14.449000	1	3.030303	-	-	1
14.449000	14.757000	1	3.030303	-	-	1
14.757000	15.065000	1	3.030303	-	-	1
15.065000	15.373000	1	3.030303	-	-	1
15.373000	15.681000	1	3.030303	-	-	1
15.681000	15.989000	1	3.030303	-	-	1
15.989000	16.297000	1	3.030303	-	-	1
16.297000	16.605000	1	3.030303	-	-	1
16.605000	16.913000	1	3.030303	-	-	1
16.913000	17.221000	1	3.030303	-	-	1
17.221000	17.529000	1	3.030303	-	-	1
17.529000	17.837000	1	3.030303	-	-	1
17.837000	18.145000	1	3.030303	-	-	1
18.145000	18.453000	1	3.030303	-	-	1
18.453000	18.761000	1	3.030303	-	-	1
18.761000	19.069000	1	3.030303	-	-	1
19.069000	19.377000	1	3.030303	-	-	1
19.377000	19.685000	1	3.030303	-	-	1
19.685000	19.993000	1	3.030303	-	-	1
19.993000	20.301000	1	3.030303	-	-	1
20.301000	20.609000	1	3.030303	-	-	1
20.609000	20.917000	1	3.030303	-	-	1
20.917000	21.225000	1	3.030303	-	-	1
21.225000	21.533000	1	3.030303	-	-	1
21.533000	21.841000	1	3.030303	-	-	1
21.841000	22.149000	1	3.030303	-	-	1
22.149000	22.457000	1	3.030303	-	-	1
22.457000	22.765000	1	3.030303	-	-	1
22.765000	23.073000	1	3.030303	-	-	1
23.073000	23.381000	1	3.030303	-	-	1
23.381000	23.689000	1	3.030303	-	-	1
23.689000	23.997000	1	3.030303	-	-	1
23.997000	24.305000	1	3.030303	-	-	1
24.305000	24.613000	1	3.030303	-	-	1
24.613000	24.921000	1	3.030303	-	-	1
24.921000	25.229000	1	3.030303	-	-	1
25.229000	25.537000	1	3.030303	-	-	1
25.537000	25.845000	1	3.030303	-	-	1
25.845000	26.153000	1	3.030303	-	-	1
26.153000	26.461000	1	3.030303	-	-	1
26.461000	26.769000	1	3.030303	-	-	1
26.769000	27.077000	1	3.030303	-	-	1
27.077000	27.385000	1	3.030303	-	-	1
27.385000	27.693000	1	3.030303	-	-	1
27.693000	27.997000	1	3.030303	-	-	1
27.997000	28.301000	1	3.030303	-	-	1
28.301000	28.605000	1	3.030303	-	-	1
28.605000	28.909000	1	3.030303	-	-	1
28.909000	29.213000	1	3.030303	-	-	1
29.213000	29.517000	1	3.030303	-	-	1
29.517000	29.821000	1	3.030303	-	-	1
29.821000	30.125000	1	3.030303	-	-	1
30.125000	30.429000	1	3.030303	-	-	1
30.429000	30.733000	1	3.030303	-	-	1
30.733000	31.037000	1	3.030303	-	-	1
31.037000	31.341000	1	3.030303	-	-	1
31.341000	31.645000	1	3.030303	-	-	1
31.645000	31.949000	1	3.030303	-	-	1
31.949000	32.253000	1	3.030303	-	-	1
32.253000	32.557000	1	3.030303	-	-	1
32.557000	32.861000	1	3.030303	-	-	1
32.861000	33.165000	1	3.030303	-	-	1
33.165000	33.469000	1	3.030303	-	-	1
33.469000	33.773000	1	3.030303	-	-	1
33.773000	34.077000	1	3.030303	-	-	1
34.077000	34.381000	1	3.030303	-	-	1
34.381000	34.685000	1	3.030303	-	-	1
34.685000	34.989000	1	3.030303	-	-	1
34.989000	35.293000	1	3.030303	-	-	1
35.293000	35.597000	1	3.030303	-	-	1
35.597000	35.901000	1	3.030303	-	-	1
35.901000	36.205000	1	3.030303	-	-	1
36.205000	36.509000	1	3.030303	-	-	1
36.509000	36.813000	1	3.030303	-	-	1
36.813000	37.117000	1	3.030303	-	-	1
37.117000	37.421000	1	3.030303	-	-	1
37.421000	37.725000	1	3.030303	-	-	1
37.725000	38.029000	1	3.030303	-	-	1
38.029000	38.333000	1	3.030303	-	-	1
38.333000	38.637000	1	3.030303	-	-	1
38.637000	38.941000	1	3.030303	-	-	1
38.941000	39.245000	1	3.030303	-	-	1
39.245000	39.549000	1	3.030303	-	-	1
39.549000	39.853000	1	3.030303	-	-	1
39.853000	40.157000	1	3.030303	-	-	1
40.157000	40.461000	1	3.030303	-	-	1
40.461000	40.765000	1	3.030303	-	-	1
40.765000	41.069000	1	3.030303	-	-	1
41.069000	41.373000	1	3.030303	-	-	1
41.373000	41.677000	1	3.030303	-	-	1
41.677000	41.981000	1	3.030303	-	-	1
41.981000	42.285000	1	3.030303	-	-	1
42.285000	42.589000	1	3.030303	-	-	1
42.589000	42.893000	1	3.030303	-	-	1
42.893000	43.197000	1	3.030303	-	-	1
43.197000	43.501000	1	3.030303	-	-	1
43.501000	43.805000	1	3.030303	-	-	1
43.805000	44.109000	1	3.030303	-	-	1
44.109000	44.413000	1	3.030303	-	-	1
44.413000	44.717000	1	3.030303	-	-	1
44.717000	45.021000	1	3.030303	-	-	1
45.021000	45.325000	1	3.030303	-	-	1
45.325000	45.629000	1	3.030303	-	-	1
45.629000	45.933000	1	3.030303	-	-	1
45.933000	46.237000	1	3.030303	-	-	1
46.237000	46.541000	1	3.030303	-	-	1
46.541000	46.845000	1	3.030303	-	-	1
46.845000	47.149000	1	3.030303	-	-	1
47.149000	47.453000	1	3.030303	-	-	1
47.453000	47.757000	1	3.030303	-	-	1
47.757000	48.061000	1	3.030303	-	-	1
48.061000	48.365000	1	3.030303	-	-	1
48.365000	48.669000	1	3.030303	-	-	1
48.669000	48.973000	1	3.030303	-	-	1
48.973000	49.277000	1	3.030303	-	-	1
49.277000	49.581000	1	3.030303	-	-	1
49.581000	49.885000	1	3.030303	-	-	1
49.885000	50.189000	1	3.030303	-	-	1
50.189000	50.493000	1	3.030303	-	-	1
50.493000	50.797000	1	3.030303	-	-	1
50.797000	51.101000	1	3.030303	-	-	1
51.101000	51.405000	1	3.030303	-	-	1
51.405000	51.709000	1	3.030303	-	-	1
51.709000	52.013000	1	3.030303	-	-	1
52.013000	52.317000	1	3.030303	-	-	1
52.317000	52.621000	1	3.030303	-	-	1
52.621000	52.925000	1	3.030303	-	-	1
52.925000	53.229000	1	3.030303	-	-	1
53.229000	53.533000	1	3.030303	-	-	1
53.533000	53.837000	1	3.030303	-	-	1
53.837000	54.141000	1	3.030303	-	-	1
54.141000	54.445000	1	3.030303	-	-	1
54.445000	54.749000	1	3.030303	-	-	1
54.749000	55.053000	1	3.030303	-	-	1
55.053000	55.357000	1	3.030303	-	-	1
55.357000	55.661000	1	3.030303	-	-	1
55.661000	55.965000	1	3.030303	-	-	1
55.965000	56.269000	1	3.030303	-	-	1
56.269000	56.573000	1	3.030303	-	-	1
56.573000	56.877000	1	3.030303	-	-	1
56.877000	57.181000	1	3.030303	-	-	1
57.181000	57.485000	1	3.030303	-	-	1
57.485000	57.789000	1	3.030303	-	-	1
57.789000	58.093000	1	3.030303	-	-	1
58.093000	58.397000	1	3.030303	-	-	1
58.397000	58.701000	1	3.030303	-	-	1
58.701000	59.005000	1	3.030303	-	-	1
59.005000	59.309000	1	3.030303	-	-	1
59.309000	59.613000	1	3.030303	-	-	1
59.613000	59.917000	1	3.030303	-	-	1
59.917000	60.221000	1	3.030303	-	-	1
60.221000	60.525000	1	3.030303	-	-	1
60.525000	60.829000	1	3.030303	-	-	1
60.829000	61.133000	1	3.030303	-	-	1
61.133000	61.437000	1	3.030303	-	-	1
61.437000	61.741000	1	3.030303	-	-	1
61.741000	62.045000	1	3.030303	-	-	1
62.045000	62.349000	1	3.030303	-	-	1
62.349000	62.653000	1	3.030303	-	-	1
62.653000	62.957000	1	3.030303	-	-	1
62.957000	63.261000	1	3.030303	-	-	1
63.26100						



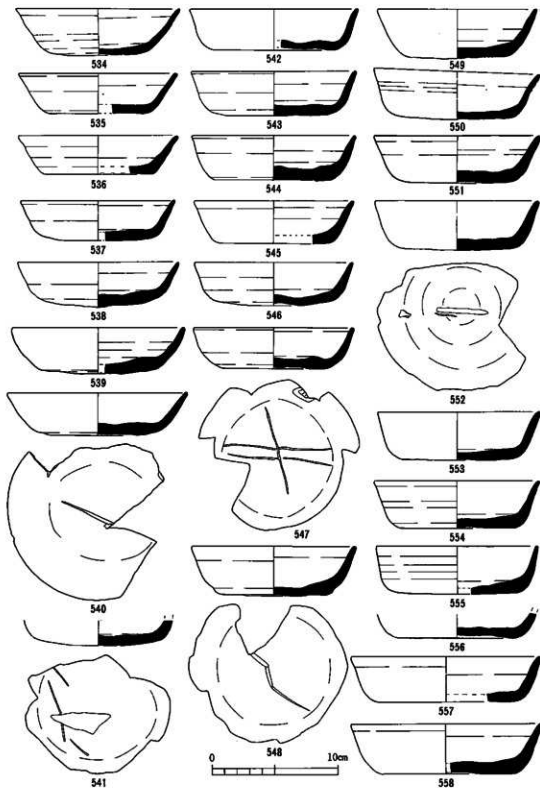
第25図 包含層出土須恵器実測図1 (1/3)



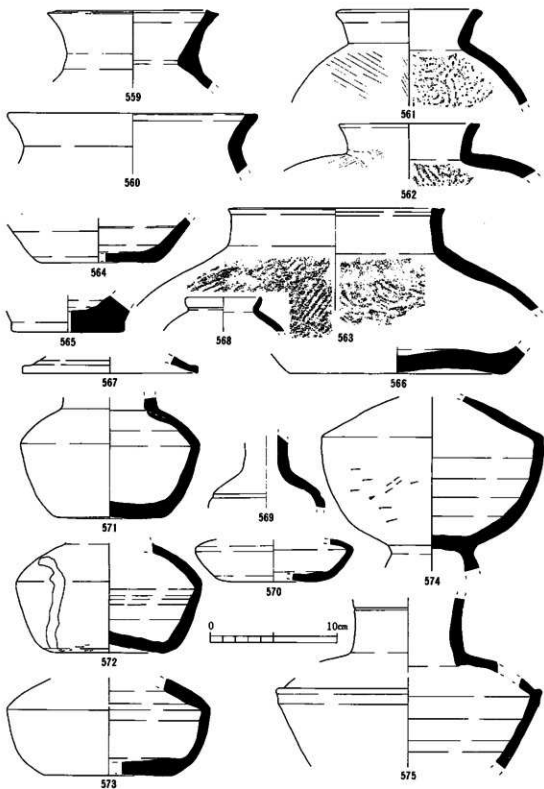
第26図 包含層出土須恵器実測図2(1/3)



第27図 包含層出土須恵器実測図3(1/3)



第28図 包含層出土須恵器実測図4(1/3)



第29図 包含層出土須恵器実測図5(1/3)

緩やかに収まる428と端部で外屈して丸く収まる430との違いがある。429の体部外面には「+」のヘラ書きが刻まれている。432・433・571～573は体部径によって、14cm代の571・572、16cm代の432・573、22cmの433に分けられる。また、同一個体と思われる421と422及び574は体部形態から脚付きの長頸壺として扱った。それぞれ体部最大径18.4cm、17cmを測る。

568は口径5.8cmを測る小型の短頸壺。420は短頸壺の蓋になると考えられる。口径13.4cmで、調整は頂部外面にヘラ削り、口縁部にヨコナデ調整を施す。570は底径7.4cm、体部最大径12.4cmを測る平瓶の体部片で、全体に偏平な器形である。

横瓶（第18図426・427・第29図561・562）

全体の器形を知ることができるのは、口縁部片の426と体部片の427で、SX02内での出土状況及び胎土などにより、同一個体の可能性が高い。口縁端部に外傾する面をとり、口縁部内外面にナデ調整が施される。口径11.8cm。体部外面は平行叩きの後にカキ目調整、内面は叩き調整（同心円文）の後で入念なナデ調整により、叩き目を消去している。体部側端に粘土板の接合痕を残す。

壺（第20図434～438・第29図559・560・563）

調査区出土の壺は口縁部片がほとんどで、口径25cm前後、口縁部が外傾しながら面をとるもの（434・435・438）と口径20cm前後で口縁部が直立気味に立ち上がるもの（436・437・563）に区分される。調整はすべて口縁部内外面にナデ、体部外面に平行叩き、内面にも叩き調整による同心円文を施す。また、酸化硬質焼成によって暗赤褐色を呈し、叩き目が口縁部外面にまで及んでいる437と酸化軟質焼成によって淡灰褐色の563はカキ目で叩き目を消去している。

体部の器形が確認できるのはSX02出土の438で、体部中位が最大径53.2cmを測り、球形を呈する。

（2）墨書土器（第9・21・30図）

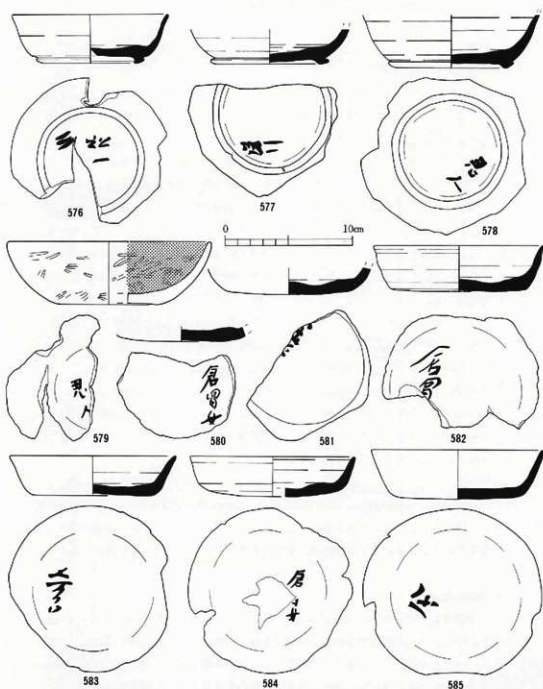
墨書土器は浅い素掘りの溝SD04-1から3点、同じくSD14から2点、SD08から1点、配石SX02から5点、奈良時代の包含層から10点が出土した。総点数は21点で、そのうち須恵器は20点、土師器は1点である。以下、判読できた墨書土器について若干の説明を加えておきたい。¹¹⁾

東家（332・333）332は建物の周りをめぐるSD04-1、333はSD14のそれぞれ遺物溜まりから出土している。吉岡康輔氏が既に指摘されているように、¹²⁾ なんらかの公的施設の一区画内で、家屋の方位による位置関係から生じた名称のように思われる。

土呂呂（334・583）第1次調査時のものも含めれば7点となり、全調査区域を通して最も出土頻度の高い個人名の墨書文字となる。

倉富女（580・582・584）女性の個人名と解したが、3点いずれも倉庫ふうの建物（SB04・05）周辺の遺物包含層からの出土であり、「倉富」を吉祥句とすれば「嘉字+女」となり実名ではない可能性も考えられる。

忍人(335・578・579) 男性の個人名で、「忍人」の史料としては『正倉院文書』に天平十五年(743)から天平宝字八年(764)ごろにかけて東大寺写経所に勤務した能登臣忍人が見いだせる。墨書土器の忍人が能登臣忍人であると断定はできないが、土器そのものが8世紀中葉を示す型式であり、能登出身の官人と同一人物である可能性も考えられる。



第30図 包含層出土墨書土器実測図(1/3)

■(576) 底部に記されている2箇所の墨書のうち、左側の「■」を記号墨書と解した。同様の墨書が本遺跡と邑知洞をはさんで西岸に位置する寺家遺跡から大量に出土しており、遺跡固有の標識墨書として祭祀での使用が示唆されている点が注目される。*

八十(585) 数字を表す墨書。本遺跡周辺で採集された墨書土器に「田地八十」があり、*この場合は単独ではあるが吉祥句的な意味をもつ嘉字と解した。

(3) 土師器

壺(第10・22・31・32回)

第8表に示すように、口径10~20cmの間で15cmをピークとする一群と口径20~25cmの一群、ばらつきはあるが30cm以上のものという分布状況からそれぞれを便宜上、小形・中形・大形と

第8表 土師器壺・口径分布

口径	10	15	20	25	30	35	40
1. 443110	1	0	0	0	0	0	0
2. 443110	4	323980	1	0	0	0	0
3. 443110	5	184750	1	0	0	0	0
4. 443110	7	649520	1	0	0	0	0
5. 443110	8	180230	1	0	0	0	0
6. 443110	10	180100	1	0	0	0	0
7. 443110	12	180100	1	0	0	0	0
8. 443110	14	180100	1	0	0	0	0
9. 443110	16	180100	1	0	0	0	0
10. 443110	18	180100	1	0	0	0	0
11. 443110	20	180100	1	0	0	0	0
12. 443110	22	180100	1	0	0	0	0
13. 443110	24	180100	1	0	0	0	0
14. 443110	26	180100	1	0	0	0	0
15. 443110	28	180100	1	0	0	0	0
16. 443110	30	180100	1	0	0	0	0
17. 443110	32	180100	1	0	0	0	0
18. 443110	34	180100	1	0	0	0	0
19. 443110	36	180100	1	0	0	0	0
20. 443110	38	180100	1	0	0	0	0
21. 443110	40	180100	1	0	0	0	0
22. 443110	42	180100	1	0	0	0	0
23. 443110	44	180100	1	0	0	0	0
24. 443110	46	180100	1	0	0	0	0
25. 443110	48	180100	1	0	0	0	0
26. 443110	50	180100	1	0	0	0	0
27. 443110	52	180100	1	0	0	0	0
28. 443110	54	180100	1	0	0	0	0
29. 443110	56	180100	1	0	0	0	0
30. 443110	58	180100	1	0	0	0	0
31. 443110	60	180100	1	0	0	0	0
32. 443110	62	180100	1	0	0	0	0
33. 443110	64	180100	1	0	0	0	0
34. 443110	66	180100	1	0	0	0	0
35. 443110	68	180100	1	0	0	0	0
36. 443110	70	180100	1	0	0	0	0
37. 443110	72	180100	1	0	0	0	0
38. 443110	74	180100	1	0	0	0	0
39. 443110	76	180100	1	0	0	0	0
40. 443110	78	180100	1	0	0	0	0
41. 443110	80	180100	1	0	0	0	0
42. 443110	82	180100	1	0	0	0	0
43. 443110	84	180100	1	0	0	0	0
44. 443110	86	180100	1	0	0	0	0
45. 443110	88	180100	1	0	0	0	0
46. 443110	90	180100	1	0	0	0	0
47. 443110	92	180100	1	0	0	0	0
48. 443110	94	180100	1	0	0	0	0
49. 443110	96	180100	1	0	0	0	0
50. 443110	98	180100	1	0	0	0	0
51. 443110	100	180100	1	0	0	0	0

して扱った。

小形壺 口縁部がくの字状に外反し、そのまま端部が丸く収まるものがほとんどであるが、体部最大径が上半にあり、外面を縦位のハケ目、内面を横位のハケ目で調整するもの(596・598・602等)、口縁部が短く外反し、カキ目調整された偏球形の体部をもつもの(607~609等)が認められる。

中形壺 小形壺同様く字口縁で端部に面をもたないもの(446・450・587等)、くの字口縁から端部が面をもつか、さらに上方につまみ出されるもの(586・594・604等)が主体となっているが、有段口縁状に端部を内傾させてつまみ上げたもの(605)や口縁部直下が幅広の隆帯状のもの(603)なども少数認められる。

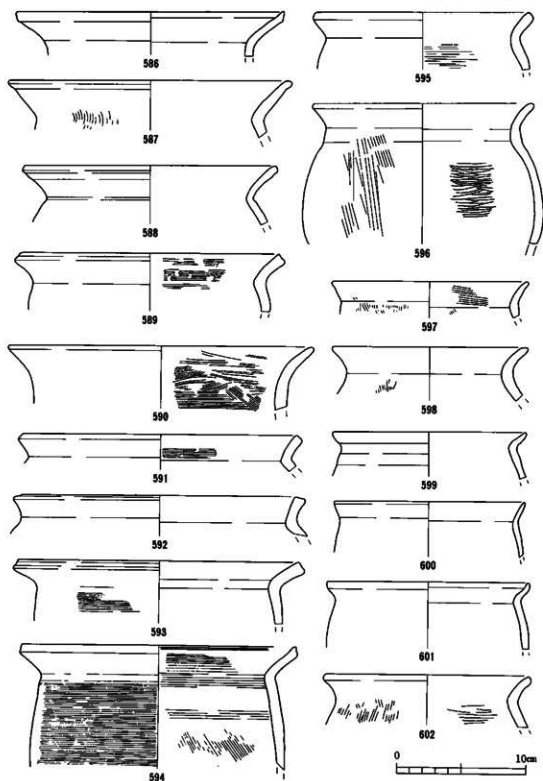
大形壺 口縁端部に面をもたないもの(454)、面取りするもの(455)、面取り部分をつまみ上げるもの(452・453)がある。また、底部形態では丸底(614・616)、平底(623)、回転糸切りの平底(352・617・618)を確認している。

鍋(第11回353)

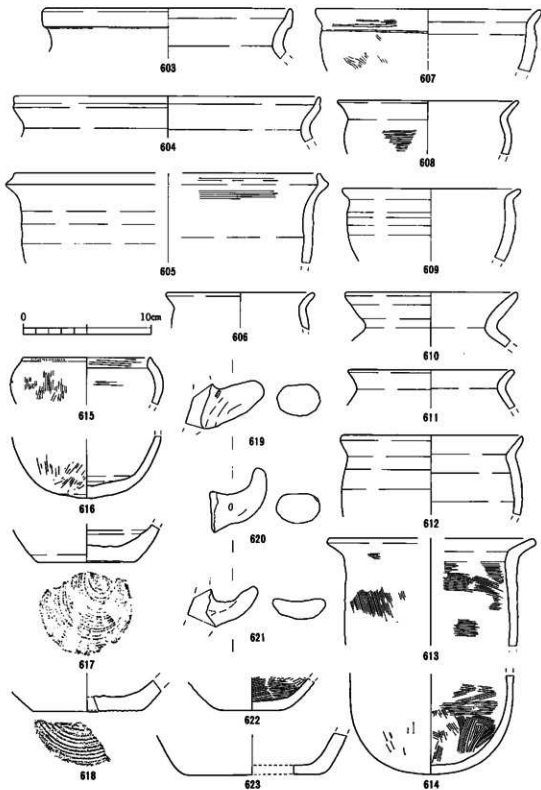
S D 出土の鍋で、口径30.6cm、器高17cmを測る。全体に器内は厚く、底部周辺をへら削りするほか、器表全面にハケ目調整が施される。器形は体部から外方に開き、口縁部でさらに外反して端部が丸く収まる。胎土は海綿骨片を含むもので、土師器全般に多く認められるタイプである。

甗(第11回354)

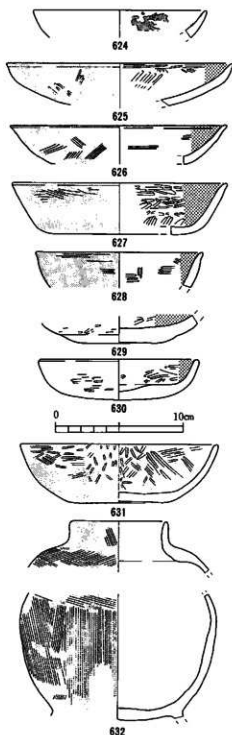
S D04-1遺物溜まり出土の354 は口径24.8cm、器高24.6cm、底部内径12.4cm(外径16.8cm)を測る甗で、体部下半が締まるが全体的には筒状を呈し、体部中位に把手が2個相対して付く器形である。内外面は細いカキ目とナデで調整し、口縁部は緩く外反しながら端部が面取りされ外縁が短くつまみ出されている。胎土には雲母・長石片を多く含むが焼成は良好である。



第31圖 包含層出土土師器実測図1(1/3)



第32图 包含厝出土土器実測図2(1/3)



第33図 包含層出土土師器実測図3(1/3)

坏・碗(第10・24・30・33図)

坏または碗には、外面赤彩内黒土師器・内黒土師器・両面赤彩土師器・土師器がある。資料が少ないので断定できないが、外面赤彩内黒の出土が多く、口径17cm前後で浅い皿状に近い形態を示すもの(456・625~627)と碗形器形(628)に分かれる。同じように内黒土師器には口径12.6cmで浅身で630と口径16cmで「忍人」と墨書された深身の579、両面赤彩には口径16cm前後(337・631)と13cm前後(457)というように法量分化が認められる。また、内面に漆の付着が見られる624はチヂミ現象も認められ漆器の代用器としての塗漆土師器の可能性が高い。

短頸壺(第33図632)

同形の須恵器を模倣した土師器の短頸壺で口径7.7cmを測る。口頸部周辺を斜位、体部にかけて縦位のハケ目調整、加えて外面全体が赤彩されている。

製塩関係の土器(第24図461・462)

461は完形に近い形で出土した支脚、円柱状の脚部から底部にかけて緩く広がりが底部内面が凹んでいる。462は棒状脚であるが、脚部上位の形態は不明。いずれも指頭によるナデとオサエ調整痕が残る。

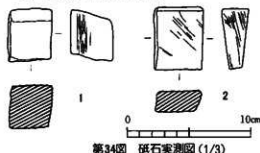
(4) 木製品(第13・14図)

何らかの加工木片と思われる製品は2点(包含層出土23・37)を除き、すべて浅い素掘りの溝からのものであり、60点以上を数える。これらの多くは欠損して原形を保つものは少ない。ここでは一定の目的で加工を施し、その種類が特定または推定できた木製品を選んで記述することにした。

1~12はS D04-1の遺物溜まりからまとまって出土した箸状木製品。完形の1~3はそれぞれ全長28.2cm、26.8cm、23.8cmを測る長いものである。面取りは4面または多面取りで、薄手のものも認められる。重量は含水状態(以下同じ)で6~8g。14は前述1~12と同じ遺物溜まりからの検出で、加工法も箸状木製品に近いが、身が太く頭部を鉾頭状に意識して削りだしてお

り、ミニチュアの陽物状または人形木製品の可能性が考えられる。全長4.3cm、身幅0.4~1.1cm、身厚0.7cm、重量2gを測る。17は全長2cmの木釘。20~23は曲物底板で、柱目の板材が用いられている。復元径は20・21が16~17cm、22・23が18~19cmになる。続く24~27も曲物に使われた幅の狭い薄板断片で、厚さ0.2~0.4cmの柱目材である。33は立体大型の舟形木製品。左半分の断片で、ヘサキ・トモの様子はわからないが、内部は舷側にそって均一にくりぬかれている。舟底の形は平底で断面はU字形を呈する。現存長11.5cm、幅3.1cm、重量30g。41は遺存している片側面を刃部の棟部分とする刀形木製品の可能性がある。現存長13.5cm、幅2.8cm、重量18g。35はヒキリ板。板状加工木片の両端が切り落とされたもので、全長24.7cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm、重量240gを測る。1面片側にヒキリウスを2個設け、側辺にV字刻みをつけているが、使用された焼けこげ痕が認められるのは1個のみである。ウスの形は径14mm、深さ8mmのU字形。34は板材を削って丸棒状にしたもので、先端の焼けこげ痕が13mmと前述ヒキリウス径に近い太さであることからヒキリギネの可能性が考えられる。

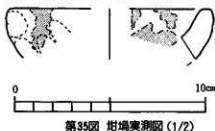
(5) 石製品 (第34図1・2)



第34図 砥石実測図(1/3)

石製品では砥石が2点出土している。1は平面・断面ともに正方形の砥石。破面を除き4面を使用するが、上面の研磨痕は顕著ではない。全長3.3cm、幅3.2cm、厚さ3.3cm、重量82gを測る。2は長方形板状の砥石で各面を使用する。全長4.8cm、幅3.7cm、厚さ1.6cm、重量60gを測る。

(6) 鍛冶関係遺物 (第35図)



第35図 坩堝実測図(1/2)

鍛冶関係の遺物として1点のみであるが、第1次調査出土の竈羽口片に焼き増場が建物周辺(J14区)の遺物包含層から出土している。小片ではあるが厚さ12cm、口径12cm、深さ3~4cm前後の小型品に復元でき、外面にはユビオサエの調整痕がみられる。

やや丸みをおびた口縁部内外面には暗灰色の溶融した金属が付着する。なお、この付着した金属の鑑定を国立歴史民俗博物館教授田口 勇氏にお願いしたところ銅滓であるとの教示を得ている。

- 註 (1) 平成2年9月26日に石川県立埋蔵文化財センターで行われた第34回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会での講演後、埋文センター職員の方々のご厚意により、国立歴史民俗博物館教授平川 南氏に本遺跡出土の墨書土器を実見していただき、数々の指導と助言を得た。記して感謝の意を表したい。
- (2) 吉岡康暢『墨書土器』『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会1983
- (3) 小嶋芳孝『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1988 金沢市
- (4) 今井淳一『四柳白山下遺跡Ⅰ』羽咋市教育委員会 1990に掲載したものである。

第6章 漆器の塗膜分析について

四柳 嘉章

羽咋市教育委員会より依頼のあった、羽咋市四柳白山下遺跡出土漆器の塗膜分析所見を以下の通り報告する。

分析の方法

漆器の器形は盃状のもので、広葉樹の横木取りである。片面が剝離しているが、総赤色漆器の可能性が大きい。

塗膜分析は漆塗膜の細片をエポキシ系樹脂（アラルダイトGY1252JP、HY837）に包埋後、その断面を研磨し顕微鏡観察によって、手板試料と比較検討をおこなうものである。

分析結果（塗膜カラー図版2－右下）

塗膜層構成は木地固め（渋）の上に、①炭粉層が施されている。層厚は薄いところで24、35 μm 、厚いところで73.05 μm 、平均48.7 μm である。炭粉は1 μm 以下の均一な微粒子が大半であるが、8 $\times$ 4 μm の大きなものも若干含まれている。本層の定性分析はしていないが、炭粉粒子の空隙状況からみて渋層と考えられ、¹⁰ 上層にも4～5 μm の渋層が認められる。この上に②赤色漆層（ベンガラ？）が施されているが、層厚は24、35 μm とやや厚い。粒子は1 μm 以下の微粒子である。

考 察

四柳白山下遺跡は8世紀を主とした集落跡で漆器も同時代となれば、総赤色のものとしては全国最古例となる。しかし残念ながら出土状況が不詳であることと、上層において一部中世遺物が認められたので、時期判定の情報を得るために塗膜分析を行った。

分析の結果、漆器の塗装工程は炭粉渋下地の上に、中塗りの黒色漆をせせず直接赤色漆が施された、いわば簡素化された普及型の漆器であると判断された。

渋下地の漆器は現在のところ11世紀代に東北（青森）や北陸（石川）で使用され、¹⁰ 以後普及型の安価な漆器として、中世には一般的なものとなり、近代にいたるまで大量に生産された。一方古代の漆器製法は『延喜式』によるところの「土漆」（鉾物粒子を含む漆下地）の上に、研ぎを伴いながら何層もの漆層を塗り重ねる方法が一般的である。¹¹ 9世紀前半の羽咋市寺家遺跡土坑内出土漆皿（ケヤキ）¹² や平城京左京一条三坊SD650出土の須恵器环形漆碗¹³も同様のものではあった。

加えて赤色漆器の古い例は9世紀前後とされる平城京一条三坊SD650出土の端反碗（内赤外黒色）¹⁴ と、滋賀県大津市瀬田野畑遺跡の碗（内赤外黒色）¹⁵、石川県では加賀市田尻シズベイダン遺跡の皿（内赤色、12世紀中葉）¹⁶ ぐらいである。赤色（朱）漆器の使用が貴族間

で盛行するのは9C後半から10世紀とみてよいであろう。つまり、それ以前の8世紀代の挽きもの漆器は黒色漆のものしかなく、四柳白山下遺跡の年代、即ち8世紀中葉前後の赤色漆器の出土例は皆無ということになる。

以上の点から、炭粉浜下地の四柳白山下遺跡出土漆器は中世の所産と考えられる。しかし赤色漆の盤形態では中世の出土例はわずかであり、貴重な資料が追加されたといえよう。

- 註 (1) 永嶋正春「中世漆器の塗膜層構成について」『西川島一能登における中世村落の発掘調査』
穴水町教育委員会、1987
- (2) 四柳嘉章・江頭俊郎「古代末期の浜下地漆器について—加賀市田尻シンペイダン遺跡出土
漆器の塗膜・定性分析」『中世北陸の在地窯—生産と流通の諸問題』北陸中世土器研究会、1990
- (3) 四柳嘉章「古代—近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学会会誌』第34号 石川考
古学会、1991
- (4) 同上
谷内碩央『釜屋・新保・猫ノ目遺跡』羽咋市教育委員会、1982
- (5) 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所、1985
- (6) 同上
- (7) 同上
林 博通・栗本政志「近江国府関連官衙跡の調査—大津市瀬田野堀遺跡の調査概要」『古代
文化』第35巻第1号 古代学協会、1985
- (8) 田嶋明人『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会、1979
四柳・江頭註2文献

※本稿では漆工用語の説明は省略している。註3文献を参照いただければ幸いである。

第7章 四柳白山下遺跡の大型植物化石

流通科学大学 南木睦彦

1. 大型植物化石のリスト

四柳白山下遺跡は石川県羽咋市にあり、能登半島の基部邑知地溝帯に位置する。考古遺物から奈良時代（8世紀前半代）と考えられる建物の周囲をめぐる溝から、植物化石に富む堆積物が2地点で採集された。堆積物は0.5mm目のふるいで水洗篩分けされ、同定可能と考えられる化石が拾い上げられた。以上の処理は発掘担当者により行われ、拾い上げられたものが筆者に分析依頼されたので、種類分けおよび同定をした。同定後の試料はSD04地点のものがMM923、SD03地点のものがMM924の番号を付けて流通科学大学に保管されている。

同定結果を第9表に示す。大量に産出したものと、栽培植物および栽培されていた可能性がある植物の写真を図版23、24に示す。

同定されたものは、クワ属の種子が過半を占めた。クワ属を除くと、草本が種類数、個数ともに多い。両地点の群集組成の差異はあまりなく、同様の傾向を示した。ただし、SD04地点でイネやイヌビエなどで炭化したものが産出したのに対し、SD03地点ではマメ科A以外は炭化種実とは産出なかった。

本本ではクワ属がいくつも多産した。クリ、ムラサキシキブ属、ガマズミ属ガマズミ節は普通に産出した。カヤのみが針葉樹で、他はいずれも落葉広葉樹であった。

草本ではヒユ属、スゲ属A、イネ、アサが多産した。ホタルイ属A、シロザ近似種、イヌコウジュ属またはシソ属、ヤナギタデ、ヘビイチゴ属、ナス属A、イヌビエ、イネ科A、イネB、エノキグサ、ホタルイ属B、エノコログサ属、カヤツリグサ属A、カヤツリグサ属Bなどが普通に産出した。

2. 栽培植物等

栽培されていたことが確実なものは、モモ、イネ、アサ、マメ科A、シソ属、ナス、メロン仲間である。また、栽培の可能性があるものはクリ、シロザ近似種、ヒユ属、イヌコウジュ属またはシソ属である。

クリ（図版23-1）はいずれも破片で計測が困難であったが、少なくとも長さ22mm以上はあった。野生のものとしては最大級であり、栽培されていた可能性がある。

モモ（図版23-5）は、半分に割れたものが2個体産出した。長さ×幅×厚さ（半分の値）が、24.9×20.3×8.8mm、および26.4×20.4×9.8mmであった。

イネ（図版23-9~11）は未炭化の穎、炭化した穎、炭化した胚乳の、三つの状態で産出した。

アサ（図版24-17）はいずれも果皮が取れた種子の状態で産出した。

シロザ近似種（図版24-20.21）とヒユ属（図版24-22.23）は、いずれも人里雑草であったとも考えられるが、栽培の可能性もあると思われる。

マメ科A(図版24-29)は、炭化しており、アズキやリョクトウに類似した形態をしている。長さ5.2mm、幅3.3mmであった。

シソ属(図版24-27)、イヌコウジュ属またはシソ属(図版24-28)は、長さが1.7mmから2.0mmのものを便宜的にシソ属とした。野生種にこのような大きなものはないので、これらは栽培されていたと考えられる。長さ1.4mmから1.7mmのものはイヌコウジュ属またはシソ属としたが、これらと、シソ属としたものの変異は連続しているようにも見える。

ナス(図版24-32)は、長さ3.2mm、幅2.5mm程度の偏平な種子である。野生種と比較して大きく、また縞目状の彫紋の稜が顆粒状の組織から出来ている点で現生のナスと一致するので、ナスとした。

メロン仲間(図版24-33)は、8個体が産出しており、2個体が計測可能であった。長さ×幅×厚さは、8.2×3.6×1.1mmおよび5.2×2.0×0.8mmであった。

多様な栽培植物ないしその可能性がある植物が産出したが、建物跡をとりまく溝からの産出であることを考えると、この付近で栽培されていたというよりはむしろ、食用等に使っていた栽培植物を投棄したものが産出したと考える方がよいであろう。

3. 古植生

堆積物が採集された遺構のような小規模な溝では、遠方からの遺体が流れ込む可能性が小さい。したがって、産出したものは、堆積の場周辺に生育していたか、人が投棄したものである。

草本で水湿地等の湿った環境を好むものには、サナエタデ、ホタルイ属A、ヤナギタデ、ホタルイ属B、ボントクタデ、ミゾソバ、ヘラオモダカなどがあった。いずれも湿地ないし抽水植物であり、浮葉植物や沈水植物などの、水深があるていど必要な植物は見られなかった。一方、畑地や路傍などのややかわいたところに生育するものには、ヒユ属、シロザ近似種、ヘビイチゴ属、エノキグサ、エノコログサ属、カタバミ属などがあった。林床などに生育するものは見られなかった。以上から、溝の中にサナエタデやホタルイ属A、B、ヤナギタデなどが生育し、溝の縁や、溝の周囲にヒユ属、シロザ近似種、ヘビイチゴ、エノキグサ、エノコログサ属などが生育していたと推定される。現在の人里の水路周辺で見られる植物相と類似している。

一方、木本はクワ属を除くと産出量が少なかった。クワ属はいちじるしく多産する事から、周囲に生育していた可能性が高い。その他の樹木に森林の主要な構成要素となるものはないので、堆積の場周辺に森林はなく、産出したような樹木が散点的に生育していたものと思われる。

第9表 四稜白山下遺跡の大型植物化石一覧表

数字は2.0kgの土壌から水洗篩分けにより取り上げられ、同定された種実の実数

和名 ¹⁾	学名	産出部位	SD04	SD03
木 本				
カヤ	<i>Torreya nucifera</i> (Linn.) Sieb. et Zucc.	葉	1	
クリ*	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	種子		1
クワ属	<i>Morus</i>	果実	8	1
カシノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> (Linn.) Vent.	種子	250	694
ヒメコウゾ	<i>Broussonetia kazinoki</i> Sieb.	核		1
モモ**	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	2	2
フジ属	<i>Wisteria</i>	芽		1
アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell. Arg.	種子		1
カエデ属	<i>Acer</i>	種子	1	
ケンボナシ属	<i>Hovenia</i>	種子	2	
ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子	1	3
カブシ	<i>Stachyurus praecox</i> Sieb. et Zucc.	種子	3	
ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>	核	6	3
ニワトコ	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.) Blume ex Graebn.	種子	2	1
ガマズミ属ガマズミ節	<i>Viburnum sect. Odontotinus</i>	核	6	
草 本				
ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A. Br. et Bouche	果実		2
イネ**	<i>Oryza sativa</i> Linn.	未炭化類	34	26
		炭化類	8	
		炭化胚乳	36	
イエビエ	<i>Echinochola crus-galli</i> (Linn.) Beauv.	未炭化類	8	10
		炭化類	6	
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	未炭化類	11	
		炭化類	1	
イネ科 A	Gramineae A	類	16	
イネ科 B	Gramineae B	炭化類	18	
イネ科 C	Gramineae C	炭化類	1	
イネ科 D	Gramineae D	類	1	
イネ科 E	Gramineae E	類	1	
スゲ科 A	<i>Carex</i> A	果実	56	69
カヤツリグサ類 A	<i>Cyperus</i> A	果実	3	7
カヤツリグサ類 B	<i>Cyperus</i> B	果実	6	5
ネタリイ属 A	<i>Scirpus</i> A	果実	27	6
ネタリイ属 B	<i>Scirpus</i> B	果実	10	3
イグサ属 A	<i>Juncus</i> A	種子	4	
カナムグラ	<i>Humulus scandens</i> (Lour.) Merril	種子	5	
クワクサ	<i>Fatoua villosa</i> (Thunb.) Nakai	果実	1	
アサ**	<i>Cannabis sativa</i> Linn.	種子	54	32
カラムシ属 A	<i>Boehmeria</i> A	種子	5	
サンショウソウ属	<i>Pellionia</i>	種子	5	
ミゾソバ	<i>Polygonum thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	果実	2	1
サナエタデ	<i>Polygonum scabrum</i> Moench	果実	30	38
ボントクタデ	<i>Polygonum pubescens</i> Blume	果実	1	4
ヤナギタデ	<i>Polygonum hydropiper</i> Linn.	果実	23	7
イヌタデ近縁種	<i>Polygonum cf. longisetum</i> De. Bruyn	果実	2	4
タデ属 A	<i>Polygonum</i> A	果実	1	
シロサ近縁種*	<i>Chenopodium cf. album</i> Linn.	種子	27	6
ヒユ属*	<i>Amaranthus</i>	種子	134	7
ノミノフスマ近縁種	<i>Stellaria cf. alsine</i> Grimm	種子	5	
ナデシコ科 A	Caryophyllaceae A	種子	6	
タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.	果実	1	
ヘビイチゴ属	<i>Duchesnea</i>	果実	23	7
マメ科 A**	Leguminosae A	種子		1
マメ科	Leguminosae B	種子	1	
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子	1	
エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> Linn.	種子	16	5
スミレ属	<i>Viola</i>	種子	1	
チドメグサ属	<i>Hydrocotyle</i>	果実	1	
シロネ属	<i>Lycopus</i>	果実	1	
シソ属**	<i>Perilla</i>	果実	5	
イヌコウジュ属またはシソ属*	<i>Mosla and/or Perilla</i>	果実	17	15
ネラシソ属	<i>Ajuga</i>	種子	1	
ハダカネオズキ	<i>Tubocapsium anomalum</i> (Franch. et Savat.) Makino	種子	1	2
ナス**	<i>Solanum mologena</i> Linn.	種子	5	22
ナス属 A	<i>Solanum</i> A	種子	5	22
メロン仲間**	<i>Cucumis melo</i> Linn.	種子	2	6
タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i> (Linn.) Linn.	果実	1	7
オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i> Linn.	果実	2	2
不 明				20

※1. **：栽培されていたと考えられるもの。 *：栽培されていた可能性があるもの。

第8章 遺構と遺物の検討

本遺跡の調査は第1・2次と継続して行っており、合計調査面積が隣接して約600㎡と狭い範囲である。よってここでは一括の形で遺構や遺物についてその年代と特色を検討し、遺跡の性格を明らかにするための手がかりとしたい。

土器 第1・2次調査で出土した土器は、須恵器の無台坏・有台坏及び蓋・高坏・鉄鉢・横瓶・短頸・直口壺及び蓋・長頸壺・甕・円面硯、そして土師器の坏・碗・高坏・短頸壺・鍋・甑・製塩土器・支脚・埴塼など器種が豊富である。第10表はこれらの器種構成を示したもので、点数の計算方法は口縁部計測法を用いた。¹⁰⁾ まず、全体の器種構成比率では食膳具が74.6%と高く、貯蔵具・煮炊具は4.4%、21%と低い比率となっている。用途別では食膳具、すなわち食器の比率が須恵器93%、土師器7%と須恵器が大勢を占める。むしろ年代差等を無視して扱っているため、細かく見れば時期別に若干の変化はあるだろうが、奈良時代前半を通して須恵器の優勢は変わらない。続いて貯蔵具では土師器赤彩短頸壺を除き須恵器が、煮炊具ではすべて土師器が使用されている。

次に、須恵器だけに限定した器種構成をみると、用途別では食膳具が全体の92.4%と多数を占める。器種別では有台坏(环蓋)が55.9%と最も多く、次いで無台坏が28.1%、その他は1割を切っている。土師器の場合では、食膳具が19.5%、煮炊具が79.2%となり、須恵器とは逆の構成比を示している。また、煮炊具のなかでは甕が79.2%と主体となっている。

以上、本遺跡出土土器の器種構成の様相は、能登における8世紀の傾向を示しながらも、宇野隆夫氏が既に指摘されている公的な様相の強い場での特徴をも示しているようである。¹¹⁾ さらに、第10表には現れないが、出土土器中に占める墨書土器の比率の高さも、本遺跡が官衙的

第10表 四柳白山下遺跡出土土器の器種構成比

	第1次分		第2次分		総計	
	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数
須恵器無台坏	5.63 (13.9%)	58	18.18 (26.5%)	252	23.81 (21.8%)	310
“ 有台坏	5.97 (14.8%)	59	23.85 (34.8%)	382	29.82 (27.3%)	441
“ 坏蓋	23.80 (58.8%)	191	23.56 (34.3%)	338	47.36 (43.4%)	529
“ 高坏			0.38 (0.5%)	7	0.38 (0.3%)	7
“ 鉄鉢	0.17 (0.4%)	1			0.17 (0.2%)	1
土師器坏または碗	4.28 (10.6%)	72	2.66 (3.9%)	51	6.94 (6.4%)	123
“ 高坏	0.61 (1.5%)	14			0.61 (0.6%)	14
食膳具総計	40.46 (71.6%)	395	68.63 (76.5%)	1,030	109.09 (74.6%)	1,425
須恵器横瓶			1.29 (27.3%)	54	1.29 (20.0%)	54
“ 甕	0.38 (22.2%)	21	1.99 (42.1%)	65	2.37 (36.8%)	86
“ 壺	1.33 (77.8%)	21	0.95 (20.0%)	49	2.28 (35.4%)	70
土師器壺			0.50 (10.6%)	27	0.50 (7.8%)	27
貯蔵具総計	1.71 (3.7%)	42	4.73 (5.3%)	195	6.44 (4.4%)	237
土師器甕	14.38	341	15.58 (95.4%)	263	29.96 (97.6%)	604
“ 鍋			0.29 (1.8%)	32	0.29 (0.9%)	32
“ 甑			0.45 (2.8%)	38	0.45 (1.5%)	38
煮炊具総計	14.38 (25.4%)	341	16.32 (18.2%)	333	30.70 (21.0%)	674
計測品総計	56.55	778	89.68	1,558	146.23	2,336

な性格をもつことのひとつの傍証となるであろう。出土土器の年代については、第1次の報告で記述しているため、ここではふれなかったが、既存の編年に対比すれば、田嶋編年（田嶋1988）でのⅡ3～Ⅳ1期に比定され、Ⅲ期を主体とするものと考えている。

遺構 今回の調査における最も大きな成果のひとつは、奈良時代前半の建物配置の様相を知り得たことである。第1次調査区内で検出された建物SB01～03は同じ地点での建て替えであり、いずれも一辺60～70cmの方形掘形をもち、同一方向をとる南北棟であった。続く第2次調査区内ではSB04～07が検出された。建物はいずれもSB01～03と比べると柱掘形が小さく、小規模なものであるが、周囲をめぐる溝によって建物の小区画が構成されるという共通性が確認された。なかでもSB04・05は西側柱列を揃えて南北に近接して並ぶ倉庫ふうの総柱建物であり、この2棟をめぐる溝の南端がSB01の北側柱列の線上にほぼのっている。

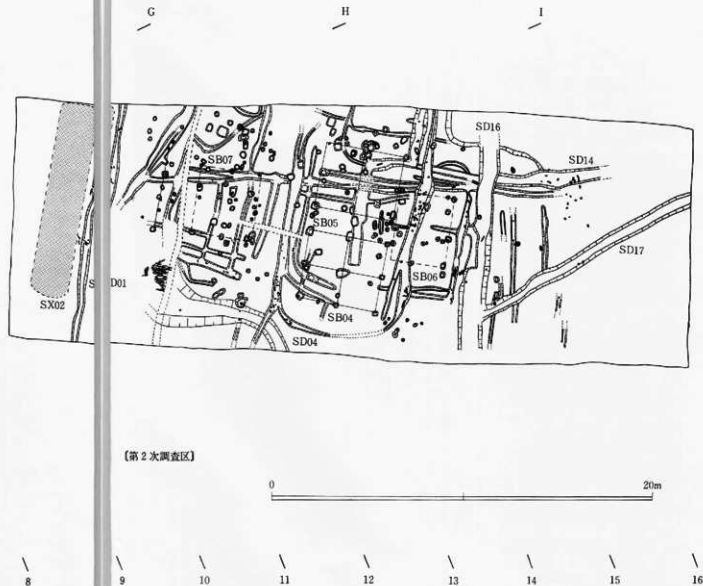
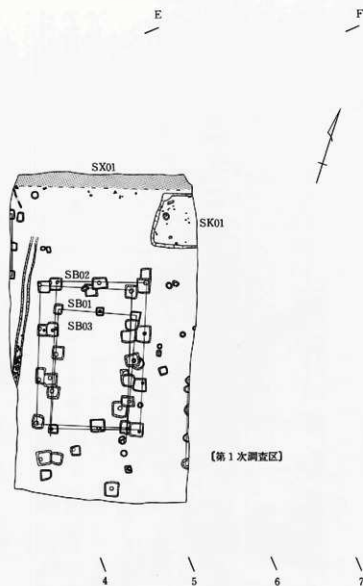
さらに、SB01～07の主軸方位はN-10°-16°-Wの間にまとまっており、建物以外の遺構である配石や柱列、溝などの配置も、こうした建物方向の同一性に基いているものと推定される。第1・2次調査区で検出された奈良時代、与木郷域内の集落は遺物の様相と同じく、官衙的な傾向を示していると考えられる。

まとめ

- (1) 「東家」「忍人」「土万呂」「倉富女」「酒女」「田地」などの文字を記す墨書土器、円面硯、転用硯、竈羽口、埴塼、木製品など本遺跡の性格に関して注目すべき遺物がある。
- (2) 各調査区域内で検出した建物は、主軸方位の同一性に基いて配置されており、建物間の同時性と計画性が表現されていると思われる。
- (3) 隣接した調査区といっても、第1次と第2次の空間では、敷地・建物の規模・性格のうえで著しい差が認められる。
- (4) 第2次調査区域内では、溝あるいは柱列（掘立柱竈）で細分した小区画内に倉庫ふうの建物などが配置されている。溝内からの多量の植物化石（モモ・クルミ等）や製塩土器・支脚・竈羽口・埴塼などの出土遺物から塩生産・鍛冶などの工房に関連した雑舎的な地区であったことが予想される。
- (5) 第1次調査区域内に配置された建物は、その規模・構造及び周辺から集中的に出土している円面硯・転用硯などの遺物から、前述の雑舎地区の管理的施設と考えられる。

以上、いくつかの観点から第1・2次調査区で検出された遺構・遺物を検討した。限られた時間と紙面の都合により消化不良の点は否めないが、与木郷域内の本遺跡周辺に官衙的な性格をもつ奈良時代の集落が展開したことは確実である。今後の周辺の調査に期待したい。

註 (1) 1988年11月4日に石川県立埋蔵文化財センターで行われた第28回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会での宇野隆夫氏の講演内容—食器研究と計量の意義をめぐって—および註2文献による。
(2) 宇野隆夫「越中の国府・荘家・村落」『歴史学と考古学』高井梯三郎先生喜寿記念論集 1988



第36図 第1・2次調査区域図 (1/200)

第11表 四柳白山下遺跡出土土器観察表1

器種	器形	観察箇所	土質	厚さ (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	計測値											出土地点	備考
								A	B	C	D	E	F	G	H	I				
297	須恵系	杯	内外面ナデ、天井部へり削り	SM3	IV	5.8(5)	3.3				14.8	0.6	2.6	3.2			SD04-1	内面陶灰		
298	"	"	"	SM3	III	4.2(1)	3.7	8.0			15.4	0.6	2.0	2.6			SD16	内面陶灰、内面へり削り		
299	"	"	"	SD3	III	19.8(8)	3.1	6.7			13.7	0.5	2.4	2.9			P 20-22			
300	"	"	"	S3, M4	IV		3.1					0.5					SD16	内面陶灰		
301	"	"	"	SM4	II	19.8(4)	2.8	9.0			16.3	0.5	1.5	2.0			P 88	内面陶灰		
302	"	"	"	SM3	II	4.0(8)	3.1	6.4			14.4	0.6	2.5	3.1			SD04-1	内面陶灰		
303	"	"	"	SM3	III	11.0(3)					14.8						SD03-1			
304	"	"	内外面ナデ	S3, M4	III	2.0(1)					14.1						SD04-1	内面陶灰		
305	"	"	内外面ナデ、天井部へり削り	SM2	III	7.5(2)		7.2			15.5						SD05	内面陶灰、内面陶灰		
306	"	"	"	SM3	III	12.9(6)	2.8	10.0			18.8	0.6	2.5	3.1			SD14			
307	有金環	"	内外面ナデ、底面付足削り	SM4	III	4.5(3)	10.6	11.8			16.2	0.6	5.5	6.1	78		SD04-1			
308	"	"	内外面ナデ	SM3	IV	13.0(6)		11.4			16.9		6.0		77		SD04-1	底面外周へり削り		
309	"	"	内外ナデ	S2	IV			7.0	6.4				0.4				SD01	内面陶灰		
310	"	"	内外ナデ	SM4	III	3.0(8)	8.3	8.0			14.1	0.6	3.6	4.2	54		SD04-1			
311	"	"	内外ナデ	SM3	III	5.5(7)	7.4	7.2			13.0	0.4	3.7	4.1	52		SD09			
312	"	"	内外ナデ	S3, M4 (長 5)	IV	7.2(3)	6.2	8.0			14.0	0.6	4.1	4.7	64		SD16	酸化軟質焼成		
313	"	"	内外ナデ	SM4	IV	9.0(2)	8.0	8.0			13.2	0.4	3.7	4.1	65		SD16	底面外周陶灰		
314	"	"	内外ナデ	SM4	III	8.0(5)	7.4	9.0			12.2	0.4	3.2	3.6	68		SD03-1			
315	"	"	内外ナデ	S3, M4	III	9.5(9)	9.0	9.0			14.7	0.7	4.0	4.7	50		SD14			
316	"	"	内外ナデ	SM4	IV	9.4(2)	9.4	9.0			14.0	0.6	4.7	5.3	64		SD10	酸化軟質焼成		
317	"	"	内外ナデ	S2	III		7.6	7.6				0.4					SD03-2			
318	"	"	内外ナデ	SM3	IV	9.0(10)	8.4	9.2			13.2	0.5	3.3	3.8	70		SD16	底面外周陶灰		
319	"	"	内外ナデ	SM4	IV	2.0(3)	9.4	10.2				0.4					SD04-1			
320	"	"	内外ナデ	SM3	III		8.8	8.8				0.4					SD16			
321	"	"	内外ナデ	SM4	IV		8.0	7.4				0.3					P 73	酸化軟質焼成		
322	"	"	"	SM3	IV		7.8	8.0				0.3					SD04-1	底面外周陶灰		
323	"	"	"	SM4	IV	4.0(3)	6.0	9.0			13.0	0.3	3.4	3.7	72		SD17			
324	"	"	"	SM4	IV	2.0(3)	8.4	10.2				0.4					SD04-1			
325	無金環	"	"	SM3	III	5.5(6)		8.0			12.5				3.0	64	SD03-1	底面外周へり削り「-」		
326	"	"	"	SM3	III	1.8(4)		8.4			13.0				3.2	66	SD14	酸化軟質焼成		
327	"	"	"	SM4	IV	12.8(9)		9.4			13.4				3.6	70	SD3-1	"		
328	"	"	"	SM4	IV	6.0(2)		7.0			12.5				3.5	66	SD04-1	"		
329	"	"	"	SM3	IV	13.6(5)		7.6			13.3				3.8	66	SD04-1	"		
330	"	"	"	SM3	III	8.6(5)		8.6			13.3				3.4	67	SD04-1	底面外周へり削り「x」 一部陶灰		
331	有金環	"	"	SM4	III	3.8(5)	8.8	9.2			13.4	0.3	3.7	4.0	75		SD04-1	底面外周陶灰「□□□」		
332	"	"	"	SM3	III	9.0(8)	8.0	8.4			13.8	0.5	3.4	3.9	60		SD04-1	底面外周へり削り「□□□」 「底面」		
333	"	"	"	SM4	IV	2.5(5)	10.2	10.0			14.1	0.4	3.3	3.7	69		SD14	底面外周陶灰、「底面」		
334	無金環	"	"	SM3	IV	3.0(2)		10.0			13.6				3.0	70	SD04-1	底面外周陶灰、「土万石」		
335	杯	重	"	SM4	IV	10.0(4)	3.5	8.6			13.8	0.8	2.3	3.2			SD14	天井部内周部底「人」		
336	無金環	"	"	SM4	III	10.0(3)		9.0			13.2				3.2	63	SD08	底面外周陶灰、「□□□」		
337	杯	重	内外ナデ、天井へり削り	S2, M3	I	12.0(8)	3.2	4.8			14.2	0.6	3.1	3.7			SX02	内面陶灰		
338	"	"	"	SM2	III	3.4(1)					14.8						SX02	"		
339	"	"	"	SM3	IV	5.0(1)	3.0	6.0			15.0	0.9	2.3	3.2			SX02	"		
340	"	"	"	SM2, L1	IV	6.5(8)					15.4						SX02	酸化軟質焼成		
341	"	"	"	SM3	III	5.0(2)	3.1	6.2			14.3	0.8	2.6	3.4			SX02			
342	"	"	"	SM3	IV	3.2(4)	3.7	6.4			15.4	0.9	2.5	3.4			SX02	酸化軟質焼成		
343	"	"	"	SM4	IV	5.6(1)	3.4	7.0			14.6	0.6	2.4	3.0			SX02	内面一部陶灰		
344	"	"	"	SM4	III	5.0(7)	2.9	8.7			15.2	0.4	1.9	2.3			SX02			
345	"	"	"	SM2	III	3.1(1)					14.3						SX02			
346	"	"	"	S3, M4	IV	10.4(6)	3.3	7.7			14.3	0.7	2.2	2.9			"			

第12表 四柳白山下遺跡出土土器観察表2

時代	器種	器形	図	土	片割	容量 (ノリ)	計測値											出土地点	備考
							A	B	C	D	E	F	G	H	I				
366	甕	環	内外ナデ、天井ヘリ割り	SM3	IV	2.7(4)	2.9	6.6	11.8	0.6	1.7	2.3			SM02	酸化炭素線 内面ヘリ割「-」?			
367	"	"	"	SM2, L1	IV		3.5									"			
368	"	"	"	SM2, L1	IV	1.5(4)	3.5		13.2							外面陥没			
369	"	"	"	SM2	IV	3.2(1)			11.5							内面割り			
370	"	"	"	SM3	I		3.5									"			
371	"	"	"	SM3	II		2.0	7.4			6.5					"			
372	"	"	"	SM3	II	6.3(4)	2.0	8.0	13.7	0.6	1.5	2.5				外面陥没 内面ヘリ割「-」			
373	"	"	"	SM3	IV	7.0(2)	3.0	5.5	13.6	0.8	2.4	3.2				内面陥没、酸化炭素線			
374	"	"	"	SM4	I	9.0(6)	3.3	7.4	14.0	0.5	2.0	2.5				外面陥没			
375	"	"	"	SM2	II		2.6				0.5					"			
376	"	"	"	SM3	II		2.0				0.5					"			
377	"	"	"	SM4	I		2.0	9.4			0.4					外面陥没			
378	"	"	"	SM3, L2	IV	5.0(3)	2.0	12.0	16.8	0.6	1.1	1.7				"			
379	"	"	"	SM4	IV	6.1(4)	3.3	10.0	16.0	0.5	1.3	1.8				内面ヘリ割「+」 酸化炭素線			
380	"	"	天井ヘリ割り	M3, L2	IV		3.3				1.0					"			
381	"	"	内外ナデ、天井ヘリ割り	SM3	IV	4.6(4)	3.1		18.4		0.7					外面陥没			
382	"	"	短台杯	M3	II	3.4(3)	8.4	8.0	13.6	0.5	4.8	5.1	81			"			
383	"	"	"	SM3	II	2.0(2)	7.6	8.8			0.4					底部外面ヘリ割「X」?			
384	"	"	"	M3, L2	IV	10.4(4)	7.0	8.0	11.8	0.4	3.6	4.0	73			酸化炭素線 底部外面ヘリ割「-」			
385	"	"	"	SM3	II	1.4(4)	7.6	7.6	11.5	0.3	3.7	4.0	71			"			
386	"	"	"	SM3	IV	2.0(3)	7.7	8.7			0.5					底部外面陥没			
387	"	"	"	SM3, L1	IV		6.0	8.0			0.4					底部ヘリ割「X」?			
388	"	"	"	SM3	II	9.0(6)	8.2	8.6	14.3	0.6	3.7	4.3	80			底部外面ヘリ割「へ」			
389	"	"	"	SM4	IV	8.4(3)	7.7	8.8	13.2	0.4	3.6	4.0	84			口縁部外面一部陥没 底部外面ヘリ割「=」			
390	"	"	"	SM4, L	IV	12.0(7)	7.4	8.8	12.0	0.5	3.6	4.1	70			底部外面ヘリ割「-」			
391	"	"	"	SM4	IV	16.0(1)	7.2	8.2	12.2	0.5	4.1	4.6	71			底部外面ヘリ割「-」			
392	"	"	"	SM2 I 9-4型	II	7.2(8)	9.2	8.2	14.1	0.7	3.9	4.0	56			外面一部陥没			
393	"	"	"	M3	II	1.7(3)	6.7	7.8	12.3	0.3	3.9	4.2	81			"			
394	"	"	"	SM4	II	10.0(4)	8.0	9.8	13.4	0.5	3.2	3.7	64			"			
395	"	"	"	SM4	IV	8.5(1)	8.4	10.0	14.0	0.3	3.0	4.1	72			"			
396	"	"	"	SM3	II	10.0(7)	8.0	9.8	12.7	0.4	4.0	4.4	74			酸化炭素線			
397	"	"	"	SM4	IV	4.0(3)	2.2	8.2	12.7	0.4	3.8	4.2	77			底部外面ヘリ割「-」			
398	"	"	"	SM3	IV	2.0(3)	8.2	9.6	13.8	0.5	3.3	3.8	70			酸化炭素線 底部外面ヘリ割「-」			
399	"	"	"	M3, L2	IV	10.3(1)	8.0	10.0	13.4	0.5	3.5	4.0	70			"			
400	"	"	"	SM3	II		8.7	9.4			0.4					"			
401	"	"	"	S3, M4	IV		8.8	9.0			0.3					"			
402	"	"	"	SM1	IV	4.1(3)	10.0	10.4			0.4					"			
403	"	"	"	SM2	II		2.7(3)	7.5	8.7		0.5					"			
404	"	"	短台杯	S3	S1	1.0(2)	5.4		9.1				2.9	70		"			
405	"	"	"	SM2	II	3.4(3)	6.0		10.7				3.6	71		酸化炭素線 底部外面ヘリ割「-」			
406	"	"	"	SM3	II	5.0(4)	8.0		13.4				3.4	58		酸化炭素線			
407	"	"	"	S3, M4	II	19.2(2)	8.0		13.4				3.4	64		底部外面ヘリ割「へ」			
408	"	"	"	SM3	IV	14.0(6)	7.4		13.1				3.7	63		"			
409	"	"	"	S3	IV	2.5(3)	8.0		12.5				2.9	57		酸化炭素線			
410	"	"	"	SM4	IV	6.0(8)	8.5		12.6				3.6	68		"			

第13表 四柳白山下遺跡出土土器観察表3

器名	器種	器形	観察	胎土	厚さ (mm)	計	A	B	C	D	E	F	G	H	I	出土地点	備考
411	須恵系	無台座	内丹ナデ	SM4	IV		10.0									SX02	酸化鉄質焼成 口縁内外面磨
412	"	"	"	SM3	IV	4.6(10)	7.9									"	口縁外面へ9番「=」 外面降灰
413	"	"	"	S3	III	2.3(1)	7.4	10.3						3.4	71	"	口縁外面から底縁にかけて磨灰?
414	"	"	"	SM3	IV		8.0									"	酸化鉄質焼成
415	"	有底高	"	SM4	III	9.2(7)	5.0	16.6				5.2				"	解部透かし有
416	"	無底高	底縁外面へタ彫り	S1	SM3	III	8.0									"	"
417	"	"	内外面ナデ	SM	III		13.0									"	解部透かしのみ、416と同一 體か
418	"	"	底縁外面へタ彫り	S2	IV		5.2									"	外部内面降灰
419	"	長頸瓶	口縁部内外面ナデ	SM3	III	2.4(5)			6.2							"	"
420	"	底 蓋	内外面ナデ、天井部へタ彫り	SM3	IV	3.0(1)			13.4							"	内面降灰
421	"	底 蓋	内外面ナデ	SM3	II			10.4								"	外部外面降灰
422	"	"	外部外面下平へタ彫り	SM3	IV		8.6									"	割付きの広口蓋か? 421と同一體か
423	"	"	底縁付近へタ彫り	SM4	IV		6.0									"	"
424	"	長頸瓶	内外面ナデ	S1	SM3	IV										"	酸化鉄質焼成、暗赤褐色
425	"	底 蓋	ナデ	SM3	III		11.4					3.1				"	外底降灰
426	"	横 蓋	外部外面へタ、平行明り	SM4	II	8.0(40)			11.8							"	外部外面内面、接合部
428	"	長頸瓶	内外面ナデ	SM3	II	4.4(22)			13.0							"	口縁部二条の沈線
429	"	"	外部下平へタ彫り	SM3	II		11.4	9.0				2.2				"	428と同一體か、 外部へタ「+」
430	"	"	内外面ナデ	SM4	II	5.0(12)			13.7							"	口縁部三条の沈線
431	"	"	外部下平へタ彫り	SM4	II		9.8	8.4				2.1				"	429と同一體か、外部沈線
432	"	"	"	SM4	III		6.0	16.6		8.0						"	外部沈線
433	"	"	外部へ底縁へタ彫り	SM3	II		9.0	22.0		11.5						"	外面降灰
434	"	底 蓋	口縁部内外ナデ	SM3	II	2.0(1)			23.4							"	内外面降灰
435	"	"	外部下平明り、 内面同心円状	SM3	I	2.0(5)			25.2							"	外面降灰
436	"	"	口縁部ナデ、外部外面平行明り、 内面同心円状	SM3	II	2.2(1)			19.4							"	"
437	"	"	"	SM、M3	IV	2.3(4)			23.0							"	酸化鉄質焼成、暗赤褐色
438	"	"	"	SM3	II	17.5(43)			26.8							"	肩部有台座、解部透 かし有
439	"	底 蓋	内外面ナデ、天井部へタ彫り	SM4	III			10.4								"	天井部外面磨 灰不自然
440	"	"	"	SM4	IV	7.0(7)	3.6	8.4	15.4		0.6	2.6	2.6			"	酸化鉄質焼成
441	"	有台座	内外面ナデ	SM4	IV	7.0(10)	9.4	9.0	13.3		0.4	3.4	3.0	75		"	底縁外面磨、割部不 自然
442	"	底 蓋	天井部へタ彫り	SM3	III	9.0(5)	2.0	8.0	14.0		0.3	2.0	2.5			"	内面磨、割部不 自然、外面降灰
443	"	有台座	内外面ナデ	SM3	IV		8.0	9.0				0.2				"	底縁外面磨、割部不 自然
445	"	底 蓋	内外面ナデ、天井へタ彫り	SM3	I	6.1(6)	3.3	8.0	15.6		0.8	2.5	3.3			I J 13 区	内面へタ「=」 外面降灰
446	"	"	内外ナデ、天井へタ彫り	SM4	III	6.4(4)			15.8							J 14 区	"
447	"	"	"	SM3、L2	II	10.8(6)		8.0	16.7			2.3				J 13 区	"
448	"	"	"	S3、M2	IV	6.0(1)			16.2							G 10 区	酸化鉄質焼成
449	"	"	"	M4、L2	III	9.7(7)			15.8							I-J 11 区	外面降灰
470	"	"	"	SM4、L2	IV	5.0(3)	3.4	10.7	15.7		0.5	1.9	2.4			K 13 区	"
471	"	"	"	SM4	III	14.3(6)	3.7		16.5					1.3		L M 13 区	外面降灰
472	"	"	"	SM4	III	2.8(2)			16.0							I 11 区	解部
473	"	"	内外ナデ	SM3	IV	8.0(5)	2.2	8.0	14.6		0.6	2.7	3.3			J 10、J 13 区	内面へタ「=」

第14表 四柳白山下遺跡出土土器観察表4

期別 皿	器種	器形	図	窯	胎土				厚さ (mm)	計 測 値									遺 跡 出土地点	備 考
					海砂 片割	砂 粒	雲母	黒炭 屑		A	B	C	D	E	F	G	H	I		
474	須恵系	杯	Ⅲ	内内ナデ、天井ヘナナリ		S3, M2	Ⅲ	1.0(3)	2.3	8.0	13.8	0.8	1.4	2.2				I11, L16区	内面陶灰	
475	"	"	"	"		S3, M2	I	5.5(1)			12.6			1.8				J 12 区	外面陶灰	
476	"	"	"	"		L1, M3	Ⅳ	8.4(3)	3.0	8.0	14.2	0.5	1.6	2.1				K14, M14, L16区	内面ヘナナリ	
477	"	"	"	"		SM4	I	8.3(4)			14.2	1.5						K L 12 区	外面陶灰	
478	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	6.2(3)	3.0	8.3	14.0	0.7	1.6	2.3				G10, L11区		
479	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	8.0(5)	2.9	8.4	15.0	0.6	2.0	2.6				L12, J13 区	内面ヘナナリ	
480	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	4.6(2)			15.3							J12, L13区	内面ヘナナリ	
481	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	1.0(4)	2.8	6.0	15.0	0.5	2.5	3.0				K13, M14区	外面陶灰	
482	"	"	"	"		SM2	Ⅳ	4.3(3)	2.9	7.6	14.9	0.8	2.2	3.0				N 14 区	内面ヘナナリ	
483	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	6.0(3)	3.5	5.3	14.4	0.5	2.5	3.0				I 11, 12 区	内面陶灰	
484	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	3.7(4)	3.3	7.8	14.4	0.3	1.8	2.1				K12, 13 区	外面陶灰	
485	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	2.8(3)	3.4	8.8	15.2	0.4	1.8	2.2				L13, 14 区		
486	"	"	"	"		SM3 (9番)		5.6(1)			15.2							L14 区	酸化物質検出	
487	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	3.5(3)	2.9	7.7	15.0							M16 区	内面全体に黒炭	
488	"	"	"	"		SM, M3	Ⅳ	5.2(1)	9.0		14.5			2.1				L15 区		
489	"	"	"	内内ナデ		SM4, L	Ⅲ	6.5(2)	7.6		14.7			1.5				J10, N16 区		
490	"	"	"	天井ヘナナリ		S3, M4	Ⅲ	10.4(4)	3.5	5.2	14.8	0.6	2.2	2.8				J12-13 区	内面ヘナナリ	
491	"	有台杯	"	内内ナデ		SM3, L2	Ⅳ	7.0(3)	7.0	8.0	11.8	0.3	4.0	4.3	60			H11 区	底面外面ヘナナリ	
492	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	10.6(3)	8.6	8.6	12.8	0.3	3.7	4.0	68			K11, J12 区	酸化物質検出	
493	"	"	"	"		M3, L2	Ⅳ	8.3(3)	9.0	8.4	13.1	0.4	3.9	4.2	75			自然発光内	酸化物質検出	
494	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	1.4(3)	8.0	8.8	12.0	0.3	3.7	4.0	72			I 10 区		
495	"	"	"	"		SM3	Ⅳ	9.0(3)	8.0	9.6	12.7	0.3	3.7	4.0	73			K14 区	酸化物質検出 外面全体に黒炭	
496	"	"	"	"		SM3	I	5.0(5)	7.0	7.6	10.9	0.3	3.3	3.4	77			H11 区	外面陶灰	
497	"	"	"	"		SM, M3	Ⅲ	7.4(4)	8.0	8.4	11.4	0.3	3.7	4.0	80			J12 区		
498	"	"	"	"		M3	I	1.0(3)	8.2	8.6	13.6	0.5	3.1	3.4	83			K13 区		
499	"	"	"	"		SM4	Ⅲ	12.0(7)	8.2	8.2	12.9	0.4	3.4	4.0	79			J11 区	底面外面ヘナナリ	
500	"	"	"	"		SM4	Ⅳ	1.0(5)	8.4	9.0								L14, M15 区	酸化物質検出 底面内面ヘナナリ	
501	"	"	"	"		SM4	Ⅲ		8.6	9.0				0.3				J9 区		
502	"	"	"	"		SM3	Ⅲ		8.4	8.0				0.4				M14 区		
503	"	"	"	"		SM3, L2	Ⅲ	9.0(7)	9.0	9.8	13.1	0.4	3.1	3.6	86			L14 区	口縁外面に黒炭？ 胎土？	
504	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	6.0(7)	9.0	10.4	14.0	0.4	2.8	3.2	88			K15 区	底面外面ヘナナリ	
505	"	"	"	"		SM4	Ⅲ		9.3	9.4				0.5				M15 区	底面外面ヘナナリ	
506	"	"	"	"		M3, L2	Ⅲ	17.0(8)	8.2	8.4	13.9	0.4	4.2	4.6	88			L14, 15 区	外面陶灰	
507	"	"	"	"		SM4	Ⅳ	1.5(3)	8.5	8.2	15.6	0.5	4.3	4.8	89			J14 区	酸化物質検出	
508	"	"	"	"		M2, L1	Ⅲ	4.0	9.0	9.4	14.0	0.5	4.0	4.5	79			K14 区	底面内面ヘナナリ	
509	"	"	"	"		M4, L2	Ⅳ	22.3(8)	8.6	8.8	14.2	0.5	3.4	3.9	81			L M15 区	底面外面ヘナナリ	
510	"	"	"	"		SM3	I	19.9(12)	8.0	9.6	14.0	0.3	3.7	4.0	79			L14 区	外面陶灰	
511	"	"	"	"		SM3	Ⅳ	20.0(4)	10.0	10.4	14.2	0.3	3.5	3.8	86			M14 区		
512	"	"	"	"		S2	I	11.0(5)	10.0	10.0	14.7	0.3	3.7	4.0	72			J14 区	酸化物質検出	
513	"	"	"	"		SM3	Ⅳ	6.0(8)	9.0	9.8	14.0	0.3	3.5	3.8	88			G-H10 区	底面外面ヘナナリ	
514	"	"	"	"		SM3	Ⅳ	2.0(5)	8.0	10.0	13.7	0.3	3.8	4.1	79			J10 区	酸化物質検出	
515	"	"	"	"		SM3	Ⅳ	2.4(15)	10.4	11.0	14.3	0.3	4.0	4.3	80			K11 区	口縁内外面に黒炭？	
516	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	11.0(1)	10.0	10.8	13.1	0.6	3.5	4.1	80			J9 区	底面外面ヘナナリ	
517	"	"	"	"		SM3	Ⅳ		10.0	10.0				0.2				H10 区	底面外面ヘナナリ	
518	"	"	"	"		SM4	Ⅳ	2.0(6)	9.0	9.8	14.0	0.5	3.4	3.9	81			H11 区		
519	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	14.6(3)	10.4	10.6	15.1	0.4	4.6	5.0	79			M15 区		
520	"	"	"	"		SM3	Ⅲ	1.5(2)	10.4	10.4				0.4				K14 区		

第16表 四柳白山下遺跡出土土器観察表6

観測 No.	器種	器形	調整	胎土			厚容量 (%)	計測値											遺構 出土地点	備考
				海綿 片骨	砂 粒	雲母 等		A	B	C	D	E	F	G	H	I				
564	須恵器	壺	底部外面付込へう割り	SM4	II			9.6										M13区		
565	"	"	"	SM4	IV			8.8										K10区	底面片、外面へう割り	
566	"	"	"	SM3	III			16.8										I11区	"	
567	"	高杯	内外面ナデ	SM	II			12.7										I12区	底面片	
568	"	短筒壺	"	SM	IV		2.9(6)				5.9	1.0						I13区	断面赤褐色	
569	"	"	"	SM	II													K15区	底部沈没	
570	"	平皿	内外面ナデ	SM3	III			1.4	12.4				3.5					J14区	"	
571	"	壺	底部下半へう割り	SM4	II			9.0	16.0			5.9						J、K11区	外面陥没	
572	"	"	"	SM3	II			9.2	14.4			5.4						K13、14区	"	
573	"	"	"	SM4	IV			11.0	16.0			5.2						J14区	"	
574	"	長頸壺	"	SM3	IV			6.6	17.0			9.4						M14区	胴付口、底部外面陥没	
575	"	"	"	SM2	IV				20.4									K14区	口周部沈没、底部に 割れをもつ	
576	"	有台杯	内外ナデ	SM2, L1	IV		10.5(5)	8.2	8.2		12.2	9.4	3.4	3.0	7.0			N、M14区	底部外面陥没「w」+ 「□」(陥没)	
577	"	"	"	SM4	IV			9.0	9.0			9.3						N14区	底部外面陥没「□」 (陥没)	
578	"	"	"	SM4	II			9.2	9.8			9.3						N14、L15区	底部外面陥没「蓋入」	
579	土器類	埴	内外面ナデ	SM、M3			1.2(4)	9.0		16.0				4.3				J9区	内面褐色、底部外面 陥没「蓋入」	
580	須恵器	有台杯	内外ナデ	SM4	IV			8.4										J13区	底部外面陥没「金貨穴」 (陥没)	
581	"	"	"	SM4	IV			9.2										I10区	底部外面陥没部分の割	
582	"	"	"	SM4	IV		6.9(3)	9.4		13.2				3.6	7.5			I14区	底部外面陥没「w」(w)、 (陥没)	
583	"	"	"	SM4	IV		13.0(3)	9.0		13.0				3.1	9.4			K13区	底部外面陥没「土万石」付	
584	"	"	"	SM4	IV		19.0(7)	8.4		13.0				3.1	7.3			I14区	底部外面陥没「金貨穴」 酸化物質混入	
585	"	"	"	SM3	IV		19.0(3)	8.2		13.3				3.8	8.9			M14区	底部外面陥没 判別不能 (*)	

観察表中、〔調整〕については、各部位外面、内面の順に記入した。分配していない場合は内外面共通の調整手法であることを表している。

〔胎土〕は海綿骨片・赤褐色粒・雲母・石英・長石・岩石粒の形状、大きさ、含有量を裸眼で観察した。そのうち、石英・長石・岩石粒などは、ほとんどの土器が共通の傾向を示していたので、表中では砂粒として表記した。量は主観的にみて、過有量と思われるものを判断基準に3とし、以下5：非常に多い・4：多い・2：少ない・1：非常に少ないと表記した。また、断面とは、須恵器のみに行ったもので、安里 進「須恵器の断面色層と六世紀の焼成技術」『考古学研究』を参考に、酸化焙焼によって生成した茶褐色系の色層を「酸化層」、還元焙焼によって生成した青灰色系の色層を「還元層」とし、内外表面から内部まで完全な酸化層を0類、内外表面のみ還元層で、内部は全面的に酸化層が残るものをⅠ類、還元層が内外表面からある程度内部まで及んでいるが、芯にはまだ酸化層が残るものをⅡ類、内外表面から芯まで完全に還元層のものをⅢ類、その他変則的な色層をなすものをⅣ類として分類、表記した。

〔現存量〕については、基本的に口縁部の残存率を24分割法で、さらに状況に応じて()内に底部の残存を表した

〔計測値〕については、A：高台径、B：底径、C：口縁部ヨコナテ幅の直径あるいは体部最大径、D：口径、E：口縁部ヨコナテ幅あるいは口縁部高、F：Eに対する体部下半の高さ、G：体高、H：器高、I：体部の最も張り出した所から口唇部端へ直線を引いて計測した角度をそれぞれ表記した。



版



(1) 遺跡近景(北から)



(2) 調査風景(西から)



(1) SU14～19検出状況(南から)



(2) 掘り上がったSU14～19(南から)



(1) SX02検出状況(南から)



(2) SX02内土器検出状況(南から)



(1) 調査区全体遺構検出状況(西から)



(2) 調査区西側遺構検出状況(北から)



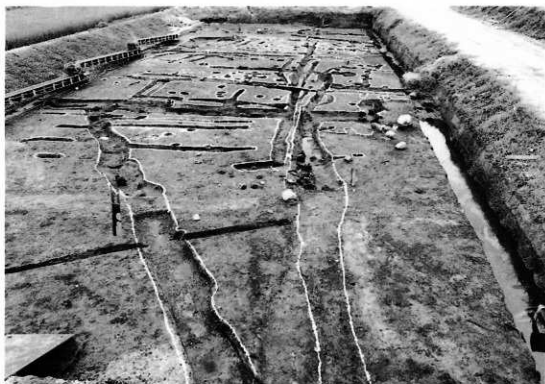
(1) 調査区中央遺構検出状況(北から)



(2) 調査区東側遺構検出状況(北から)



(1) 掘り上がった調査区全景(西から)



(2) 掘り上がった調査区全景(東から)



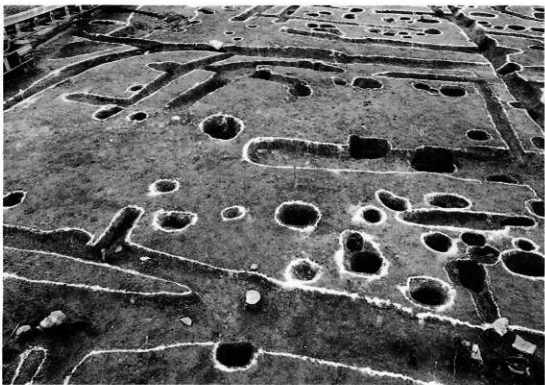
(1) 掘り上がった調査区中央1 (北から)



(2) 掘り上がった調査区中央2 (南から)



(1) 掘り上がったSB04・05・SD04(北から)



(2) 掘り上がったSB04・SD04(東から)



(1) 掘り上がったSB06(南から)



(2) 掘り上がったSB07(南から)



(1) SD14内ヒキリ板出土状況(南から)



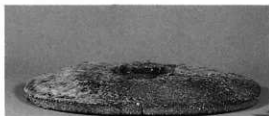
(2) SD06内土師器編出土状況(西から)



297



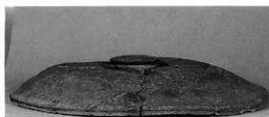
299



301



302



306



335



356



358



361



362



363



365



372



373



374



442



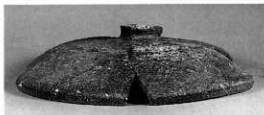
476



470



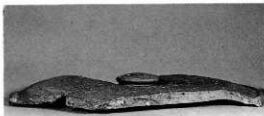
465



473



479



378



471



379



483



484



487



490



481



408



327



329



330



407



530



534



554



585



584



583



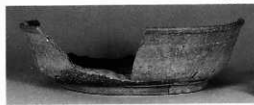
307



314



316



318



384



516



390

須恵器 無台坏・有台坏



391



394



396



506



389



509



441



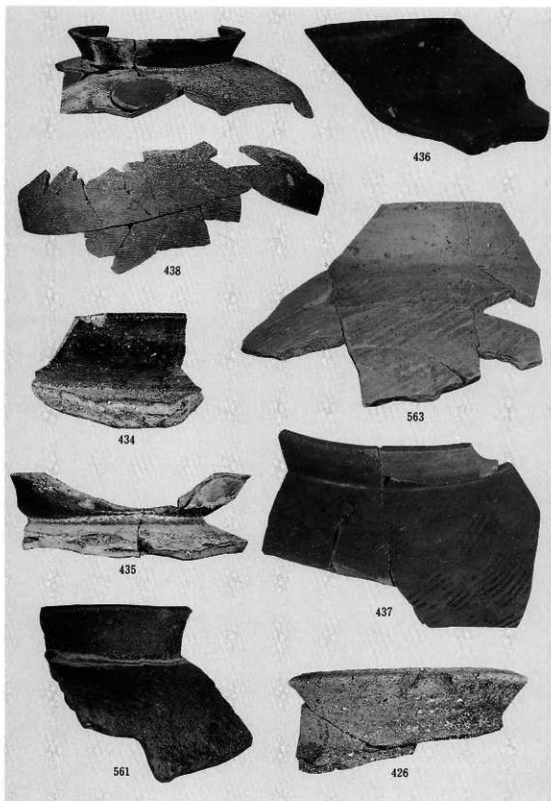
511



510



515



須恵器 甕・壺・横瓶



571



432



572



425



430



428



431



429



350



447



351



455



353



632

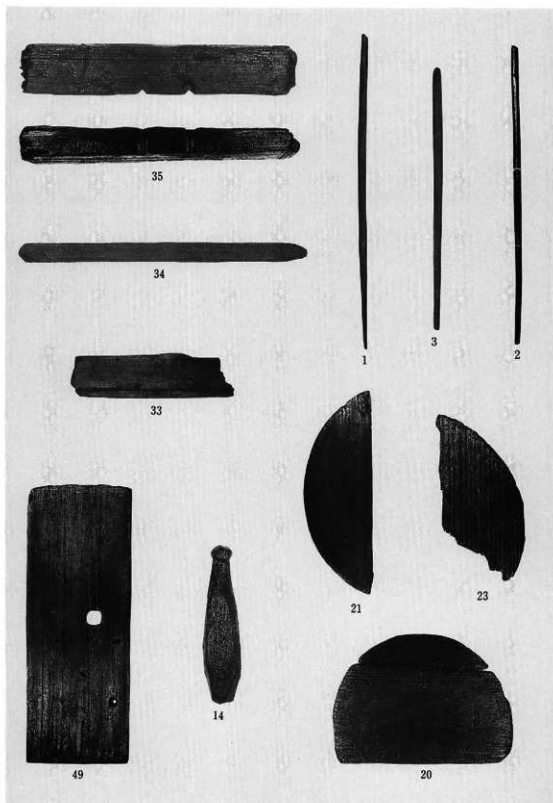


354



461

土師器 甕・鍋・甔・壺・支脚



木製品(第13・14図)



SB05・イ 1



SB05・ハ 3



SB06・イ 2



SB06・ロ 2



SB07・イ 3



SB07・ハ 1



SB07・ロ 3



SB07・イ 2



SA03・イ 4



SA03・イ 3



SA03・イ 1



580



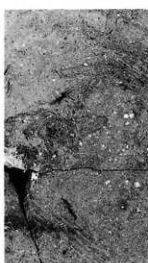
584



582



334



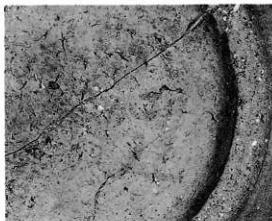
331



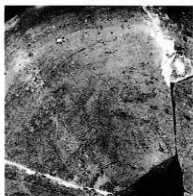
333



335



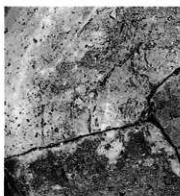
578



585



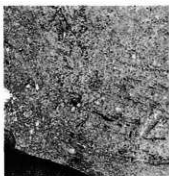
579



583



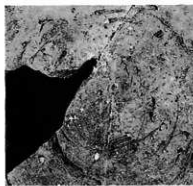
441



439



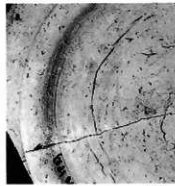
336



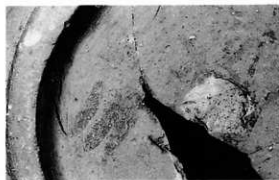
332



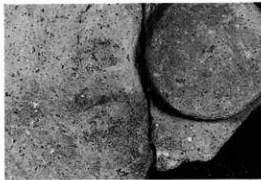
443



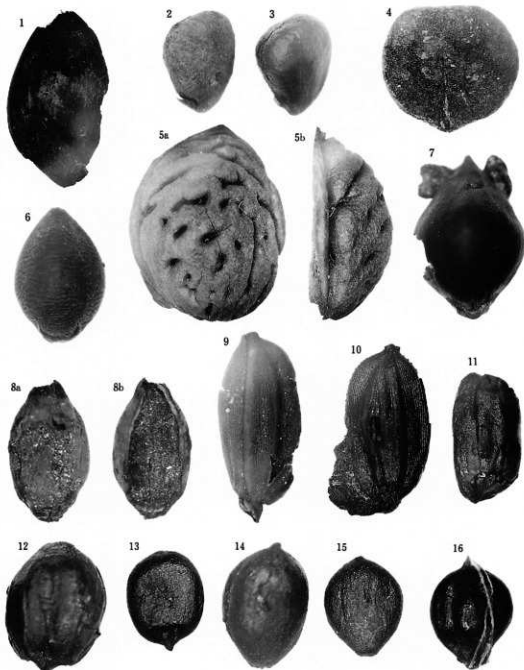
577



576



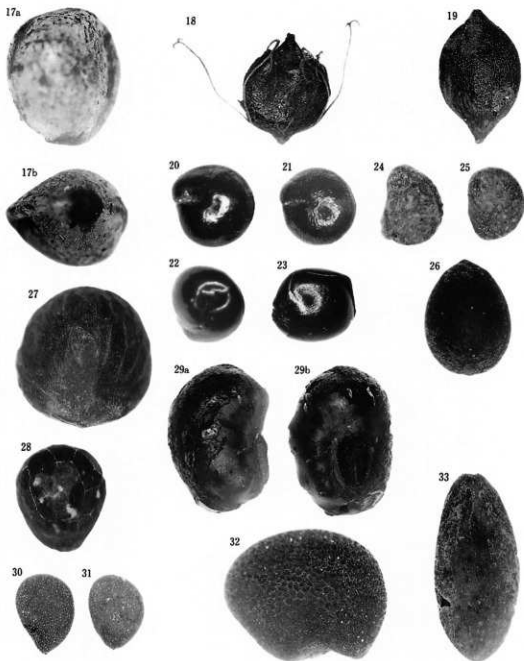
440



四柳白山下遺跡の大型植物化石 (I)

種類、倍率、標本番号の順に示した。標本番号は、群集試料番号と種類番号がハイフンでつないで示されており、MM923はSD04地点の、MM924はSD03地点の試料である。

- 1: クリ果実, $\times 3$ (MM923-1), 2, 3: クワ属種子, $\times 12$ (MM923-6), 4: ガマズミ属ガマズミ節核, $\times 18$ (MM923-5), 5: モモ核, $\times 2$ (MM923-2), 6: エノコログサ属未炭化類, $\times 12$ (MM923-18), 7: イヌビエ炭化類, $\times 12$ (MM923-19), 8: イネ科A類, $\times 18$ (MM923-20), 9: イネ未炭化類, $\times 6$ (MM923-3), 10: イネ炭化類, $\times 6$ (MM923-3), 11: イネ炭化胚乳, $\times 6$ (MM923-3), 12, 13: イネ科B炭化類, $\times 18$ (MM923-21), 14, 15: スゲ属A果実, $\times 18$ (MM923-35), 16: ホタルイ属A果実, $\times 12$ (MM923-31).



四柳白山下遺跡の大型植物化石(Ⅱ)

種類、倍率、標本番号の順に示した。標本番号は、群集試料番号と種類番号がハイフンでつながり示されており、MM923はSD04地点の、MM924はSD03地点の試料である。

17: アサ種子, $\times 9$ (MM923-4), 18: サナエタデ果実, $\times 12$ (MM923-8), 19: ヤナギタデ果実, $\times 12$ (MM923-25), 20, 21: シロザ近似種子, $\times 18$ (MM923-10), 22, 23: ヒユ属種子, $\times 18$ (MM923-9), 24, 25: ヘビイチゴ属果実, $\times 18$ (MM923-36), 26: エノキグサ種子, $\times 18$ (MM923-37), 27: シソ属果実, $\times 18$ (MM923-7), 28: イヌコウジュ属またはシソ属果実, $\times 18$ (MM923-7), 29: マメ科A種子, $\times 6$ (MM924-36), 30, 31: ナス属A種子, $\times 12$ (MM924-8), 32: ナス種子, $\times 12$ (MM924-6), 33: メロン仲間種子, $\times 6$ (MM924-4).



【発掘調査参加者】

坂井 俊次	坂井 晶子	上田 正則	宮田 光男	松柳 清枝	宮田ときの
国田吉次郎	(以上、四柳町)				
今井 勇	浜田 誉	大島とみ子	木前 明光	三門 信秀	(以上、大町)
松井 行雄	高沢あきの	(以上、下曾称町)			
横浜 栄蔵	砂田外次郎	北井よし子	(以上、酒井町)		
藤井 惣	三宅 秀雄	木谷由太郎	三宅 林三	木谷 沃平	藤井富美子
辻田 善一	溶定 千里	辻 政雄	高沢みよ子	今井 信子	田中喜久進
服部 敏子	三宅とよ子	木谷スミ子	今井チヨノ	田中 咲子	
					(以上、金丸出町)

四柳白山下遺跡Ⅱ

発行日 平成3年3月30日
 発行者 羽咋市教育委員会
 羽咋市旭町ア-200番地
 印刷所 北陸コロタイプ印刷
 羽咋郡志雄町子浦甲60
